

都市再生における制度と手法－上海を事例として－

横山, 広司 / YOKOYAMA, Hiroshi

(発行年 / Year)

2009-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2009-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

1377.5
M35-2
2008-4

2008 年度修士論文

都市再生における制度と手法
—上海を事例として—

指導教授・主査 高村雅彦 教授

副査 陣内秀信 教授

副査 永瀬克己 教授

大学院工学研究科
建設工学専攻修士課程

05R5269

横山広司

System and method of urban renewal

—In a case of Shanghai—

Hiroshi Yokoyama

Abstract

What images do you have about Shanghai? If a general image is given as a key word, economy, growth, development, and chaos etc. might be seen. It certainly expresses the one side of Shanghai. However, it is only in one side. Recently, a lot of historical architectures that remains in Shanghai are protected and renovated. And such a historical architecture is made a core and the urban renewal is held. Shanghai now at the time of becoming an economic city in the eminent world always considers three balances like protection, re-use, and the development.

In this research, I am aimed at clarifying the method of urban renewal using historical architecture in what kind of restriction in Shanghai.

As the research method, the lamplight also first solves the approval process of modern city Shanghai, and the architectural foundation that has been left at the present age is understood in Chapter 1. The change in the stance into the architectural preservation is read first seeing the flow of a historical, architectural preservation of Shanghai diachronic at the same time. Next, 《 a history appearance district and the excellent history construction protection ordinance 》 that is grounds of a historical, now architectural preservation is seen in detail.

The research of the case actually researches the technique of the urban renewal in Chapter 2. The case was divided into three kinds [macro], [mezo], [micro] according to the scale.

First of all, the macro indicates large-scale urban development. The start of urban development that succeeds to the history is a redevelopment of People's Square done from the latter half of the 1980's to the 90's. It thinks by what ideology development was advanced by considering this urban development to be a start of present age Shanghai in this research.

The stage of [mezo] considers preservation and recycling a lot of industrial inheritances left in industrial city Shanghai. What meaning who has and it began to pay attention to this become important. And, how the meaning changed Shanghai becomes an important point under discussion of the main discourse.

The stage of micro refers protection and the use of peculiar housing complex form [Lirong] especially Shanghai. Because it is a housing complex, it actually preserves, and reproduction as the crowd though assumed micro. At first, refer to Lirong's initial development [Xintiandi]. And next, refer to a different process of formation was traced [Tianzifang].

After the urban renewal of Shanghai is researched through the above-mentioned three, the opening in 2010 and the sea Expo are taken up in Chapter 3. What Shanghai starts expressing in this spectacular event held aiming at the world is considered, and it is clarified that it is an ideology of the difference from the ideology used when it redevelops People's Square.

目次

序	2
研究目的・研究方法	
第1章 近代都市上海 — 歴史的建築および都市保存の制度	
1.1 近代都市上海の成立	4
1.2 歴史的建築および都市保存法	
1.2.1 文化財保護の歴史	
1.2.2 歴史文化風貌区および優秀歴史建築保護条例	
1.2.3 産業遺産	
第2章 歴史建築遺産の保護および再生	
2.1 マクロから見る都市再生—都市再開発	19
2.1.1 人民広場	
2.1.2 創知天地	
2.2 メゾから見る都市再生—産業遺産の活用	
2.2.1 M50	
2.2.2 夢清館	
2.2.3 19参Ⅲ老場坊	
2.3 ミクロから見る都市再生—里弄再生	
2.3.1 新天地	
2.3.2 田子坊	
第3章 上海国際博覧会	67
まとめ	77
参考文献	79
おわりに	81

序

研究目的・研究方法

中国上海の都市のイメージとはどのようなものであろうか。一般的なイメージをキーワードとしてあげてみればおそらく経済、成長、開発、混沌などが多く見られるのではないだろうか。それは確かに上海の一面を言い表している。しかし一面でしかないのだ。1842年の上海開港から始まる近代都市上海の多国籍な歴史的建築遺産は今なお多くこの地に残り上海を形づくる重要な要素となっている。点としての建築と面としての都市風貌という2つの視点から、これらを保護し、再活用することで都市を再生させるという動きが近年活発になっている。世界屈指の経済都市となった現在の上海はその歴史的建築遺産の保護と活用と発展という3つのバランスを常に考慮している。

本研究では歴史的建築遺産の保護と再活用による都市再生をどのような規制のもと、どのような手法で行われているのかを歴史的建築遺産を市街地に多く残す上海を事例として研究し、その中で上海が得たものが何であったかを分析することを目的とする。

研究方法としては、まず第1章では近代都市上海の成立過程をひも解き、現代に残されている建築根本を理解する。同時にまず通時的に上海の歴史的建築保存の流れをみて、その建築保存に対するスタンスの変化を読み取る。次に現在の歴史的建築保存の根拠となっている《歴史風貌区および優秀歴史建築保護条例》を詳細にみる。第2章では実際に事例の研究しその都市再生の手法を研究する。事例はその規模によりマクロ、メゾ、ミクロの3種に分けた。

まずマクロは大規模な都市開発を指している。歴史を継承した都市開発のはじまりは1980年代後半から90年代にかけて行われた人民広場の再開発である。当研究ではこの都市開発を現代上海の始まりと見なし、どのようなイデオロギーで開発が進められたかを考えていく。

メゾの段階は工業都市上海に数多く残された産業遺産の保存と再利用について考察する。これを誰が、どのような意味をもって注目し始めたかが重要になっていく。そしてその意味が上海をどのように変えていったのかは本論の重要な論点になる。

ミクロの段階は住居、とくに上海特有の集合住宅形態である里弄についての保護と活用に関及する。ミクロ的としたが実際には集合住宅であるため群としての保存、再生である。里弄という今も多くの市民が住む里弄が評価される大きなターニングポイントになった新天地開発とその問題点を述べ、それとは違う形成過程をたどった田子坊に見る里弄再生の手法を詳細にみていく。

以上の3つを通して上海の都市再生を研究した後、第3章では2010年に開かれ

る上海万博について取り上げる。世界に向けて開かれるこの一大イベントで上海が何を表現しようとしているのかを考察し、それが人民広場の再開発の際に用いたイデオロギーとは違う新しい上海のイデオロギーであることを明らかにする。

第 1 章

近代都市上海 — 歴史的建築および都市保存の制度

1.1 近代都市上海の成立

上海市は現在人口約2500万人、中華人民共和国第2の都市であり、最大の経済都市である。18区1県からなり総面積6430平方kmであるが、中心市街地は10区749平方kmで、東京23区よりやや広い程度である。市街は南北に黄浦江が流れ、その西側を浦西と呼び上海の中心区域を形成している。東側は浦東と呼び、ここ十年ほどで開発された上海の経済を支える高層ビル群が立ち並ぶ区域である。

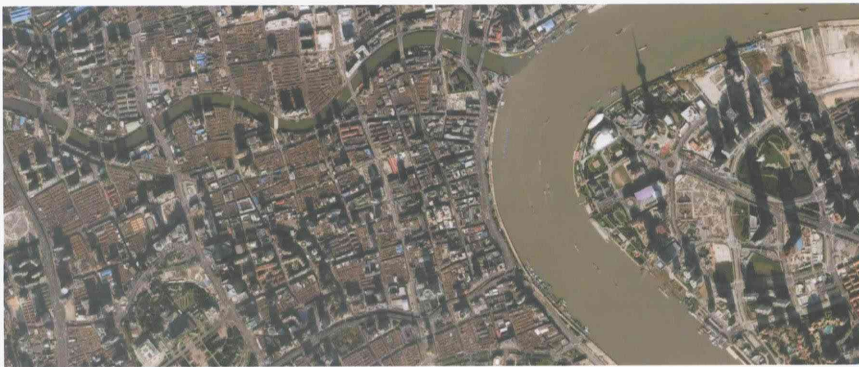


図 1-1 上海市、浦西と浦東
(2009 google DigitalGlobe)

近代上海の誕生

上海が中国の歴史に現れるのは11世紀、宋代のことである。明代の16世紀中頃黄浦江の開削により都市は経済発展を始め、倭寇の襲撃に備えるため上海县城が建設された。19世紀になると上海の貿易港としての立地の良さに目を付けた東インド会社が開港交渉を試みるが失敗に終わる。しかし、1942年アヘン戦争に敗れた清国は南京条約によって広東、アモイ、福州、寧波、上海を開港させられる。近代上海の始まりである。

1945年、租界に関する協定、第一次「土地章程 (Land Regulations)」を結んだイギリスは黄浦江西岸に租界を形成し、イギリス租界が誕生した。おくれてフランス、アメリカも条約を結びフランス租界は同じく黄浦江西岸、上海县城とイギリス租界の間に、アメリカ租界はイギリス租界北側を東西に流れる蘇州河北岸に定められた定められた。

1953年から63年にかけて起こった太平天国の乱はそ

の後の近代都市上海に2つの多大な影響を及ぼすことになる。ひとつは租界が争乱に巻き込まれる恐れを考慮して、各国軍隊が租界郊外へ進軍するときの利便性を考え租界から郊外に向かって軍用道路を建設したことである。この道路は「越界道路 (External Road)」と呼ばれ争乱終結後、各租界当局各租界当局の管理下に置かれた、その後の租界地の拡張につながっていく。もうひとつは上海県城およびその周辺に住む中国人が争乱を避け、安全を求めて租界内に避難してきたことである避難してきたことである。租界内に大量に流れ込んできた中国人に住居を提供することは大きなビジネスチャンスであり、外国商人たちはさっそく条約を改訂して中国人の租界内の居住を認めさせ、住宅地の開発を始めた。ここにその後上海の住居形態の代表となる集合住宅「里弄」が生まれたのである。1860年には「里」と名のつく住宅区は8740カ所にもおよび、爆発的に建設が進んだことがわかる。

1863年、イギリスとアメリカは防衛面の強化の必要性から租界を合併し、共同租界となった。1894年、日清戦争に勝利した日本は下関条約で上海における日本人の居留地の建設を認めさせ、その後共同租界内に日本人街が形成されていくことになる。共同租界、フランス租界は拡張を続け共同租界は1899年の第二次拡張で総面積22.3平方km、わずか0.66平方kmにすぎなかったフランス租界は1914年の第三次拡張時には10.1平方kmにまで拡大していた。さらに、管理下に置いていた越界道路両側を開発していたため、事実上の租界地はこれらの倍に近い広さであった。

租界

各国租界にとって貿易の中心となる黄浦江西岸は当然ながら最も重要な場所である。バンド (Bund) と呼ばれるこの黄浦江沿岸にはイギリス領事館、フランス領事館、上海税関をはじめ各有力商社のオフィスが顔を揃え、時代の流れとともに最新の建物が立ち並ぶまさに上海租界の顔であった。

また租界に住む外国人、特にイギリス人にとって欠かせない遊興施設が競馬場であった。開港間もない1846年ごろ



図 1-2 三和里



図 1-2 1930 年代のバンド
(常青編『大都会从这里
開始』同濟大学出版社
2005.3)

にはすでに競馬場が建設されており、その後移転と拡張を繰り返し、1861年に現在の人民広場に3代目の上海競馬場が完成した。

共同租界、フランス租界にはそれぞれ行政機関が整備され、共同租界は工部局（Shanghai Municipal Council）、フランス租界は公董局（Conseil d'Administration Municipale de la Concession Française de Changhai）とよばれ各租界を独自に管理していた。租界は世界各国からビジネスチャンスを求めて商人たちが集まる国際的な都市であったが、決して外国人のみで構成されていた訳ではない。1935年に外国籍をもつ人口は各国合わせて約39,000人いたが、租界内に居住する中国人は100万人に届こうかという数であった。最も行政機関である共同租界の工部局においても1939年当時約7000人の職員の内、5700人もの中国人が職員としてつとめていたのである。

租界の発展とともに形成されていった近代都市上海は中国人と各国外国人の文化が重なり合った多重都市だったのである。



図 1-3 大上海市街地図 1940 年

1.2 歴史的建築および都市保存法

1.2.1 文化財保護の歴史

中国の文化財保存法の歴史

中国の文化財保存の萌芽は1920年代に始まる。19世紀末から列強諸国が中国文化の調査を行うと同時に多くの文化的価値の高い工芸品が国外に持ち出されていった。1922年、北京大学に考古学研究所が設立され、1929年に中国营造学社が成立し中国古典建築の研究が進められ始めた。それらの研究をもとに1930年6月《古物保存法》が發布された。第二次大戦後の1960年代になると保存制度は一步進み建築単体の保存のみならず歴史的遺跡や名勝地の風貌保存が始まった。1961年3月《文化財保護管理暫行条例》が公布され同時に180の《第一次全国重点全国重点文物保护单位》が公布された。1966年の文化大革命は文化財保護に大きな打撃を与えることになる。文革終結後の1978年以後、文化財保護は回復の兆しを見せ始め、1982年には《第二次全国重点全国重点文物保护单位》、24の《国家級歴史文化名城》と44の《国家重点風景名勝区》の公布、ならびに《文物法》が發布された。1986年に38の《第二次国家級歴史文化名城》が公布され、その中に価値を有する歴史街区、建築群、鎮、村落など、各レベルの保存と省級歴史文化名城の制定が規定された。ここで中国の歴史文化遺産保存の概念が『点』から『面』へ変化した。1990年代になると経済的發展により歴史的都市の街区が開発により破壊され、歴史的環境の保存は新たな問題に直面した。1994年1月、《第三次国家級歴史文化名城》を公布し、歴史文化名城は合計で99都市になった。同年3月、建設部と国家文物局の共同で全国歴史文化名城保護専門委員会を設立し、歴史文化名城の保存および管理を強化した。1998年、建設部は同済大学に国家歴史文化名城研究センターを設立し、歴史文化名城保存の科学的研究を進めた。その後、国家級歴史文化名城は2008年までに110都市に増えている。

上海の文化財保存法の歴史

上海市が文化財の保存に動き始めたのは1980年代に入ってからである。1986年に上海は第二次国家歴史文化名城に指定される。1989年、国の建設部ならびに国家文物局推進の下、専門家からの幅広い意見を参考に、はじめて優秀近代建築保護リストが作成された。1990年、上海市人民政府は59（のちに追加され61）の《上海市第一次優秀近代建築》を正式に公布した。このときまだ対応する法の制定がされていなかったため、上海市文物保護単位（市指定文化財）の保存規定を参照して保存および管理を行っていた。1991年12月、計画局、房地資源局、文物管理委員会は、《上海市優秀近代建築保護管理方法》を發布し、これに基づいて1993年、1999年、2005年に第二次175カ所、第三次162カ所、第四次230カ所の優秀歴史建築が指定された。

上海市は建築単体ならず面的な保存も早くから開始している。1991年、上海市都市計画局は上海市歴史文化名城保存計画に着手し、外滩など11区域を歴史文化風貌保護区に指定した。1999年、都市計画局は《上海市中心区歴史風貌保存計画（歴史的建築および街区）》を編制し、1991年に規定された歴史文化風貌保存区の保存範囲と規制内容を明確に示した。2002年、歴史的建築および風貌地区の規制をさらに強化した《上海市歴史文化風貌区および優秀歴史建築保護条例》が正式に發布され、それまで1949年以前に建てられた近代建築が対象であったが、この条例では産業遺産も含む築30年以上の歴史的建築に対象範囲が拡大されるようになった。この条例に沿って、2003年上海市市街に12カ所、計27平方kmの中心区歴史文化風貌区が正式に公布された。2005年上海市政府は計画局、房地資源局、文物管理委員会からなる『上海市歴史文化風貌区および優秀歴史建築保護委員会』を発足させた。これは文物保護単位の保護管理は文物管理委員会、優秀歴史建築の保護管理は房地資源局、歴史文化風貌区および上記の保護建築の管理計画は計画局とそれぞれ3部門に分かれおり、文物法と条例の解釈の違いなど矛盾が生じたため3部門の協力体制を強固にする



図 1-4 第一次優秀近代建築
上海郵政局

よう組織された委員会である。

1.2.2 歴史文化風貌区および優秀歴史建築保護条例

I. 優秀歴史建築

上海の近代建築の保護法は国内においても早い取り組みである。2003年1月1日に施行された《上海市歴史文化風貌区および優秀歴史建築保護条例》の第9条の規定では

- ・ 築後30年以上経過しているもの
- ・ 建築様式、構造と技術において芸術的特色と科学研究価値を有するもの
- ・ 上海地域における建築文化の特徴を示すもの
- ・ 著名な建築家の代表的な作品
- ・ 中国産業発展史における代表的な小工場、店舗、工場と倉庫
- ・ その他、歴史的、文化的意義を有する優秀な歴史的建築

とある。この中で注目されるのは築後30年ということと産業遺産を明確に保存対象にしていることである。2005年の第四次優秀歴史建築まで合わせて632カ所、2138棟が優秀歴史建築に指定されている。

優秀歴史建築の保護管理は建築本体、保護範囲、周辺建設規制の3つの面からなる。優秀歴史建築本体については保存対象の価値および状態により以下の4つに分類される。

- 第1類 建築の立面、構造、平面構成、および内部装飾が改変されていないもの
- 第2類 建築の立面、構造、基本的平面構成、および内部の特徴的な装飾が原型を留めているもの
- 第3類 建築の立面、構造が改変されていないもの

第4類 建築の主要な立面が改変されていないもの

優秀歴史建築保護範囲内の新たな建設は認められない。優秀歴史建築に付属する施設で建設が必要な場合は計画局の審査が必要になる。審査時には市房屋土地管理部门の意見を求める。

周辺建設規制範囲内での建設には計画局の審査が必要であり計画局の許可が必要であり、使用性質、高度、容積、立面、材料、色彩等多方面からみて、優秀歴史建築の周辺空間の景觀特性や優秀歴史建築の使用への影響を確認する。審査時には市房屋土地管理部门および区政府の意見を求める。



図 1-5
優秀歴史建築計画規制範囲図
赤線内が建築保護範囲
青線内が周辺建設規制範囲
(上海市都市計画管理局編著
『上海城市規劃管理實踐』中
國建築工業出版社 2007.5)

Ⅱ. 歴史風貌区

1991年、点としての保存である優秀歴史建築では対処できない面としての保存である歴史文化風貌区が制定され、以下のように定義された。

「密集した歴史建築で構成され、建築様式、空間構造、街区景觀が上海のある一時期の地域文化の特色を表している地区を文化風貌区として定める」

現在、上海市中心部には現在12の歴史風貌区があり、その

総面積は26.96平方kmで、これは1949年当時の上海の3分の1に当たる。

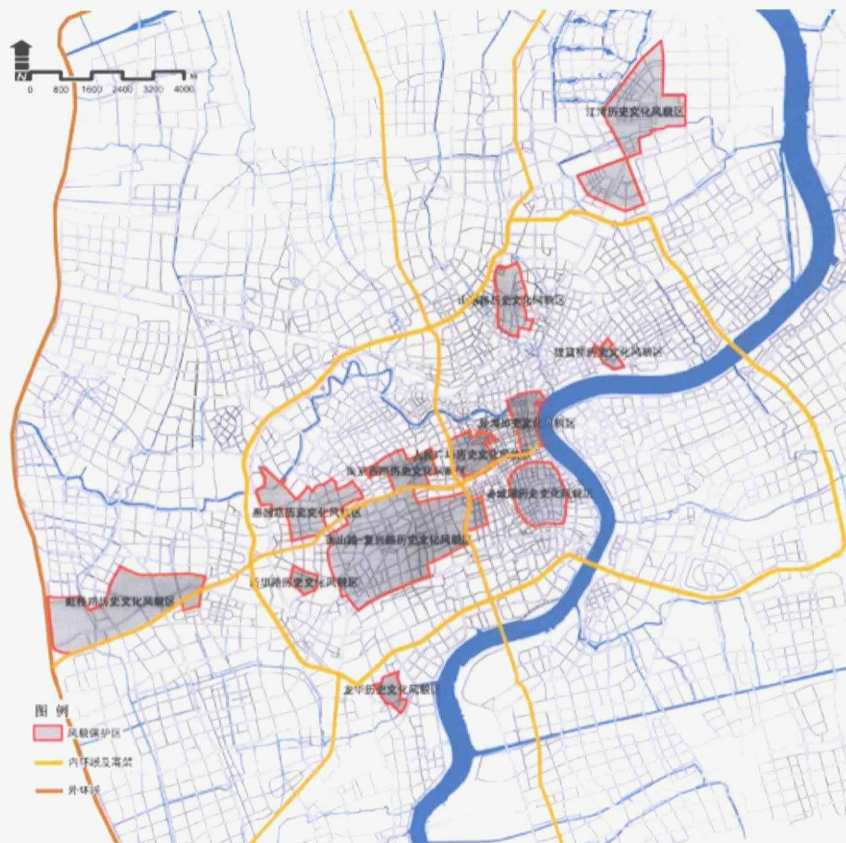


図 1-6
中心区历史文化风貌区分布图

風貌保護要素の確定

各歴史風貌区を特徴づけるものとして、街区構造、道路尺度、街区景観や、緑、中庭、塀、舗装など歴史環境の構成要素、その他、歴史的に重要な場所であるとか、社会生活と社会構造に結びついているなどが挙げられる。これら風貌地区の特徴は重要な保護対象となるが、保護計画の中では大きく4つに分類される。

- (1) 建築 (歴史形成の建築類型)
- (2) 空間 (歴史形成の街路や路地の構成、幅員、空間的スケール、景観特性と公園、庭園、広場、交差点など)
- (3) 肌理 (街区構造、ブロックのスケールや形状、建築容積、建築密度や集合体の空間配置など)
- (4) その他 (歴史、文化、社会生活および社会構造などの目)

に見えない点)

保護範囲設定

多くの風貌区がその選定前まで巨大な開発にさらされていた。現在の体制下においてもすべての開発を風貌区外でまかなうことは難しい。そこで、風貌区内の建築を5つの段階に分類し、風貌区内で保護建築、保留歴史建築が比較的集中し、空間構造の保存が良好であり、区内でも特に風貌特性が明確な区域を核心保護範囲と設定して、開発をコントロールしている。

建築保護及び更新

1. 保護建築

上海市優秀歴史建築および各級文物保護単位

中華人民共和国文物保護法および上海市歴史文化風貌区および優秀歴史建築保護条例により保護される。

2. 保留歴史建築

保護建築外で明確な特色を備えるか、人文歴史的価値を有する歴史的建築

具体保護要求は施行詳細計画或は計画法案段階の保護計画内で確認される。

3. 一般歴史建築

歴史風貌に関し、肯定的な要素を持つが、建物の質が劣り、通常では取り壊し、立て替えが許可されるもの。建物の状況により、さらに二種に分類される。

甲等一般歴史建築

風貌への貢献が高く、通常は保留を指導し、修繕を奨励する。

乙等一般歴史建築

歴史風貌に関し、一般的な建築であるが、取り壊し、新築する場合は建築規模や尺度を守る。

4. 排除すべき建築

仮設の小屋、簡素な家屋、違法建築

5. その他の建築

1～4以外の建築

増築、改築、取り壊して新築する事も可能だが、歴史風

貌に配慮する。

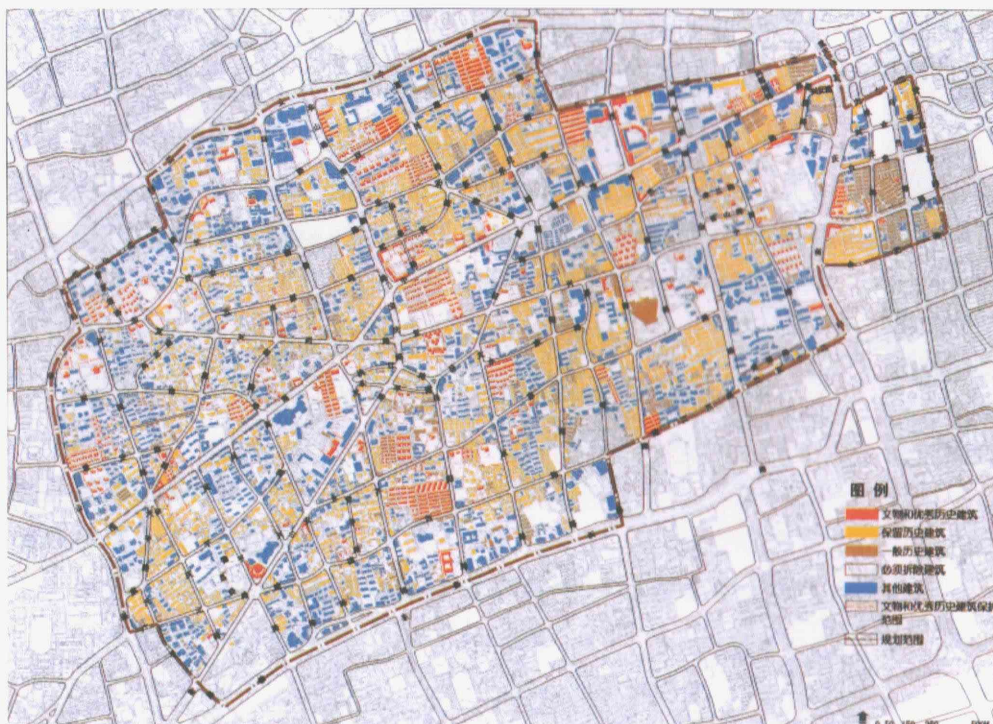


图 1-7 衡山路—復興路历史文化风貌区建筑保护および更新類別
(上海市都市計画管理局編著『上海城市規劃管理実践』中国建築工業出版社 2007.5)

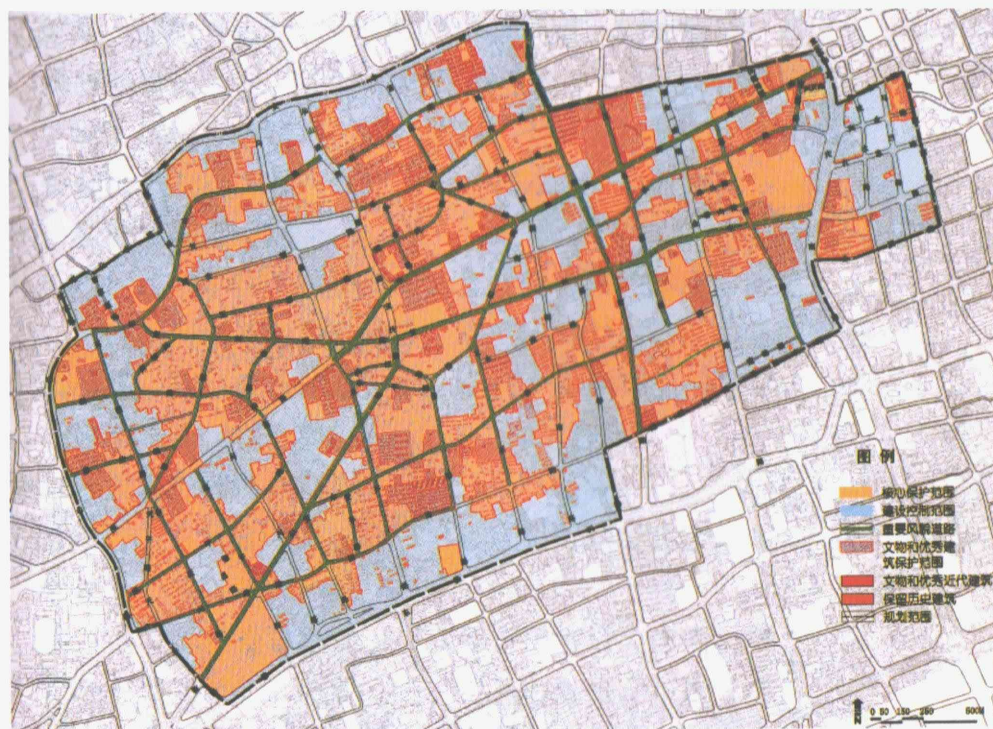


图 1-8 衡山路—復興路历史文化风貌区核心保护范围および建設規制範囲
(上海市都市計画管理局編著『上海城市規劃管理実践』中国建築工業出版社 2007.5)

風貌保護街道および空間整理

実体を持つ建築に比べ虚体としての空間は往々見過ごされがちだが、風貌区における空間の特色保護は建築のそれと同様に重要な物である。そのため、風貌区内から風貌保護街道を選定し次の3つを主要な保護内容とする。

- ・現状の幅員の維持の可否、あるいは徐々に歴史的幅員に戻す。
- ・両側の歴史的建造物の撤去の可否。
- ・街路空間における緑化などの保護要素の処理方法。

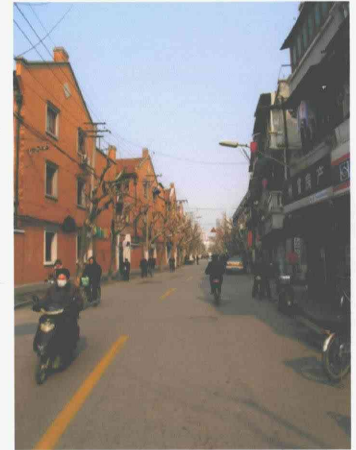


図 1-9 山陽路風貌保護道路

風貌保護道路の分類

第一種風貌保護道路

- ・道路沿線に保護建築および保留歴史建築が集中している
特色的な景観を十分に持っている
- ・歴史的な幅員を保持し、オリジナルの空間スケールを維持している

幅員は広げず、スケールや風格、周辺の保護、一般歴史建築も保全、補修、修繕を第一とする。

庭園、緑化、古樹名木、特徴的な外壁、路面舗装、並木も保護対象になり、沿線に新しく建設する場合は建築高度、容積、風格、色彩、形式、間口、セットバック、隣家との距離など厳しくコントロールされる。

第二種風貌保護道路

- ・沿線上に一定数の保護建築および保留歴史建築があり、また、一定数のその他の建築や開発土地がある。特色的な景観は第一種には及ばないが、幅員や空間スケールがオリジナルリティを保持している。

第三種風貌保護道路

- ・沿線上に一定数の保護建築および保留歴史建築がある。ただしその数は少ない。

第三種では保護建築および保留歴史建築の位置、並木、緑化などの要素にしたがって、幅員の拡張が可能である。ただし、保護建築および保留歴史建築の少ない側を拡張対象とし、保護建築および保留歴史建築は移動、一部の排除などの手段をとる。

第四種風貌保護道路

- ・沿線上に保護建築および保留歴史建築が非常に少ないが、道路構成、スケールなどに一定の特徴が見られる。

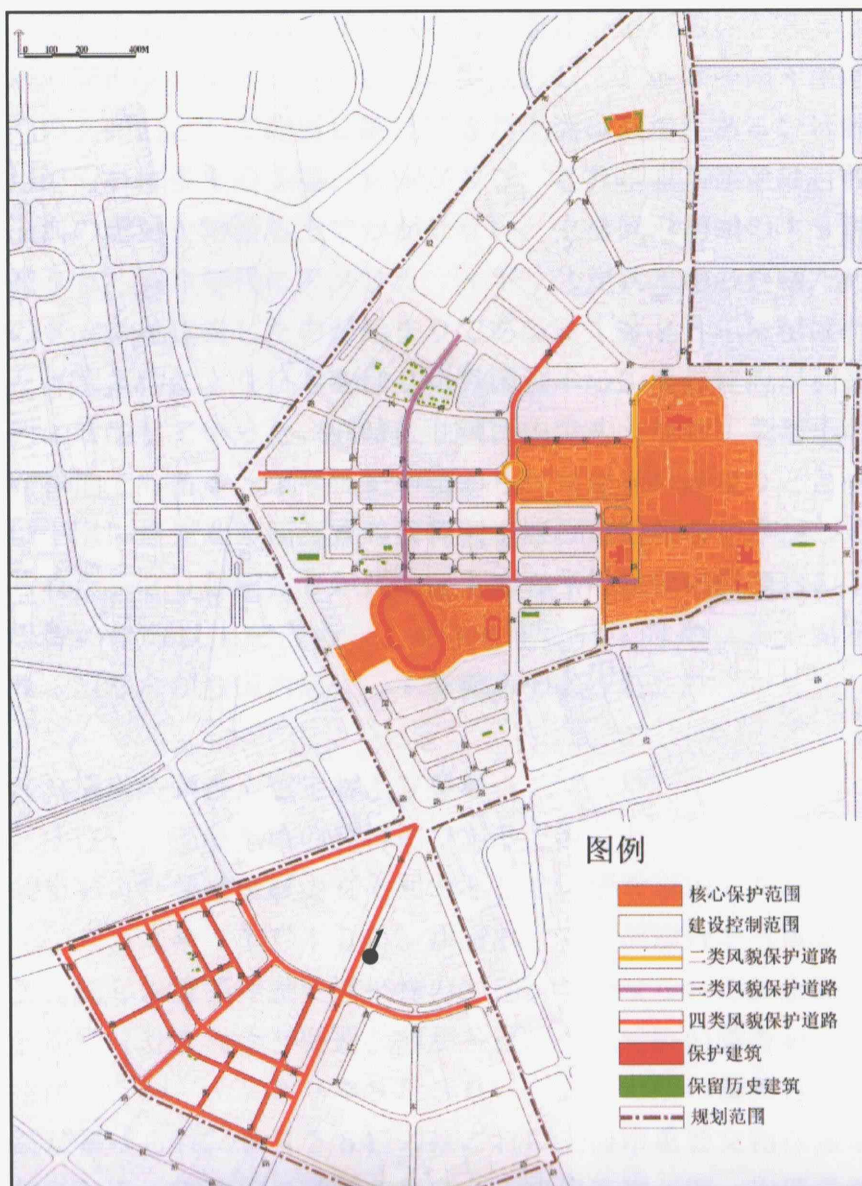


図 1-10 江湾風貌区核心保護
範囲および風貌保護道路
(伍江 王林 主編『歴史文化風
貌区保護規劃編制与管理』同
濟大学出版社 2007.12)



図 1-11 四類風貌保護道路

図 1-10 の黒丸の地点から撮
影
周りには歴史的建築はないが
この地区の構造にとって重要
な道である

1.2.3 産業遺産

現在上海では産業遺産の保存に力を注いでいる。1843年の開港以来東アジアの貿易の拠点として、或は中国江南地方の玄関口として発展し続けてきた上海は黄浦江あるいは蘇州河沿いに多くの工場、倉庫が並び、これら産業遺産は近代上海の歴史を物語る上で欠かせない。上海開港初頭の19世紀50、60年代にアメリカ、イギリスが貿易船の修繕ためのドックを建設したのが始まりである。1895年に結ばれた下関条約により日本をはじめ外国資本の工場の建設が加速的に増加していった。同時に中国国内でも上海は工業都市の発祥地でもある。19世紀中頃から洋務運動の高まりとともに上海に最先端の西洋式の武器製造廠、造船廠などがつくられた。20世紀30年代には上海の工場数は中国国内の工場数の半分以上を占め、1949年には1万余りの工場あり、当然ながら国内最大の工業都市であった。

産業遺産の調査、選定および登録

中国近代工業都市の発祥地である上海にとって産業遺産の調査および保存は歴史文化都市として重要な事項である。

1988年11月10日、建設部、文化部連合で《重要調査に関し保護優秀歴史建築物の通知》が発せられた。上海市建設局、計画局など関連部門が各自に近代建築の調査および推挙を行い、1989年8月30日、59カ所の優秀近代建築が挙げられ、9月25日にはこれに上海市重要文物保護単位を加え、市政府の承認を得て61の建築物が第一次優秀歴史建築に指定された。1998年の第三次優秀歴史建築選定調査では市計画局が同済大学建築都市計画学院に調査を委託し、同大学は比較的規模の大きな工場、倉庫、など産業遺産に着目し、近代産業遺産の基本調査を押し進めた。保存された書類や文献資料から当初60以上の著名な近代の工場をピックアップし、そのうち41カ所が確認できた。《上海市近代優秀産業建築鑑定および保護》研究報告で30カ所の保護対象の産業遺産をリストアップし、専門家による論証、関係部門による審査を経て最終的に15カ所の産業遺産が



図 1-12 多くの産業遺産が残る蘇州河



図 1-13 楊樹浦水廠

1999年に市政府が公布した第三次優秀歴史建築のリストに残ることになった。これによって都市計画局および家屋土地資源局は《第三次優秀歴史建築保護技術規定》をまとめ、保護等級、保存方法、保護範囲および周辺の建設のコントロール範囲など細部規定を定めた。2002年に発布された《上海市歴史文化風貌区および優秀歴史建築保護条例》で産業遺産の保護が明確に表記されたことは、産業遺産の保護が重視されるようになったことをあらわしている。

産業遺産の再活用

近年、上海では都市遺産の保護と同時に100余りの工場、倉庫などの近代遺産の再活用が進められている。特に『創意産業（Creative Industries）』という概念を用いての産業遺産の再生プロジェクトが多く見られる。『創意産業』は1998年に英国政府が提唱した概念で「個人の創造性や技術、才能に起源を持ち、知的財産の創造と市場開発をとおして財と雇用を生み出す可能性を有する産業群」と定義されている。2005年4月、上海は18の第一次上海創意産業聚集区を公布し、その内6カ所は工場、倉庫など近代産業遺産を再利用し経済的にも成功している。現在、上海の優秀歴史建築に指定されている産業遺産は43カ所にのぼり、創意産業による再利用は新たなビジネスチャンスとして認識されている。大量に残された工場や倉庫等の産業遺産の有効利用は創意産業とリンクし、上海創意産業と歴史的建築保存の両面から注目を集めている。

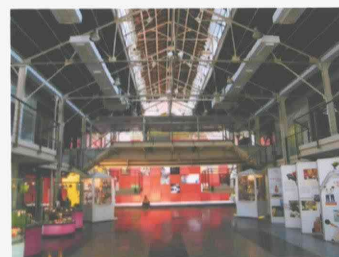


図 1-14 ブリッジ8



図 1-15 同樂坊

第2章

歴史建築遺産の保護および再生

2.1 マクロから見る都市再生—都市再開発

2.1.1 人民広場

上海人民広場は上海解放のシンボルとなるべく80年代後半から開発が始まり、行政、文化、交通、商業、緑化が一体となった現在の上海市の中心である。

そもそも人民広場の土台となったものは1861年にイギリス租界に誕生した上海競馬場であった。競馬はイギリス人にとってなくてはならない娯楽であり、重要な社交場でもあった。今も1933年に建てられたクラブハウスである旧上海レースクラブがその遺構として残っており、現在は上海美術館として利用されている。その後、人民政府の管理下に置かれた上海競馬場は人民広場として広場と公園を整備し、1954年の建国記念日に市民に正式に開放された。

1978年の改革開放、1984年の上海解放以後都市整備を進め始めた上海は都市機能の中心を人民広場に新たにつくる計画を立てる。1992年9月14日に着工した人民広場の再開発は1994年9月12日に建物を残して完成した。

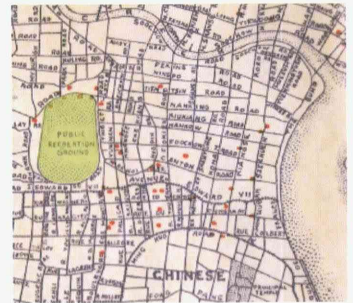


図 2-1 上海競馬場
上海全図 1932 より作図
(上海図書館『老上海地図』
上海画報出版社 2001.6)

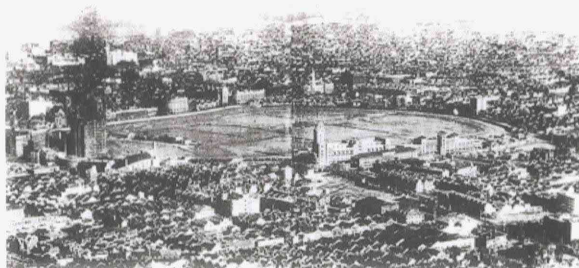


図 2-2 上海競馬場 1930 年代
(<http://www.shimpress.com/BIG5/excerpt/16.php>)

人民広場再開発

人民広場の再開発は大きく以下の3つからなる。

- ①主要施設の建設
- ②市政機能の一元化
- ③緑化公園の建設

主要施設は上海市政府庁舎、上海大劇院、上海城市規劃展

覧館（上海都市計画展示館）、上海博物館で市政府の南側に長さ600m、幅員32mの人民大道が東西に走る。これらに12万平方mの人民公園が一体となり新しい上海の中心が誕生する。

1994年に竣工した上海市政府庁舎は面積8.7万平方m、高さ72mの19階建てで、花崗岩張りの高さ9mの柱10本が並びファサードに特徴を与えている。設計は上海建築設計研究院である。



図 2-3 上海市市政府庁舎

この市政府庁舎の西側、敷地面積2万平方kmに建てられたのが上海大劇院で、フランス人建築家ジャン＝マリ・シャープンティ（Jean-Marie Charpentier）の設計で3.5億元の費用を投じて1998年8月に完成したコンサートホールである。大中小3つのホールもち世界の一流の芸術文化に触れることのできる芸場をつくることで人民広場を文化的にも中心にすることが計画された。

市政府庁舎の東側には上海城市規劃展覽館が4000平方mの敷地に建設費2.6億元で2000年に完成し2000年2月にオープンした。伝統的な中国の城門をイメージにデザインされたもので、屋根は上海市の花であるモクレンをイメージしている。

上海博物館は3800平方m、地下2階地上5階で建築費



図 2-4 上海大劇院



図 2-5 上海城市規劃展覽館

4億3千萬元をかけ1996年に完成した。設計は上海建築設計研究院の邢同和である。博物館は「天円地方」という古代中国の宇宙観をデザインに取り入れている。天円地方とは天は円く地は方形であるという中華文化の宇宙観であり、円は星の運行を表している。日本でも天円地方の意匠は古い寺院の垂木などで見ることができるが、最もその宇宙観を体現しているのは首都北京にある天壇である。15世紀に明の永楽帝明の永楽帝が建立したとされ、歴代皇帝が天に五穀豊穡を祈ったり雨乞いをした施設で、皇帝の力を示す重要な建物であった。天壇は「天南地北」に従い紫禁城の南に築かれている。



図 2-6 上海博物館



図 2-7 人民広場
(2009 google Digital Globe)

中華都市のイデオロギー

これらを整理してみるとこの計画の中に流れる中華都市のイデオロギーが見えてくる。まず、古代中国の「南面為王」の信仰があげられる。これは天上界の上帝の居所である北極星に呼応して地上界の天子もその玉座を南面させるという思想である。上海市政府庁舎は完全な南を向いている訳ではないがこれは下地となった楕円形の競馬場によるものであると考えられる。南面させた上海市政府庁舎を中心に東西に上海城市規劃展覽館と上海大劇院を配置し全面に人民大道を通す。これら左右の施設はどこか似通ったデザインコードをもち、左右対称性を一層強調している。さらに市庁舎から南に伸びる軸線上に上海博物館を置く。南に築かれた博物館が天壇地方を表すならば、市庁舎は何を表しているのだろうか。ここでもう一度市庁舎のファサードを見てみると前面に並んだ10本の柱に注目される。中国伝統建築では柱間の数は建物の格を表し、厳しく取り締まられた。最高位の11間は紫禁城内のもっとも重要な施設、太和殿のみである。その思想を継承して建てられたものに紫禁城前の天安門広場を囲む3つの最重要施設、毛主席記念堂、人民大会堂、中国国家博物館が11間で作られている。

つまり上海市政府庁舎の10本の柱は第2位の格を示しており、北京に次ぐ第2の都市を主張しているのである。市庁舎から伸びる南北軸と東西軸はここが伝統的中華都市の構造をもち続けていることを表している。上海市政府庁舎は上海の紫禁城であり、博物館は天壇なのである。中華帝国の時代には小さな一地方都市に過ぎなかった上海が、ついに中国第2の都市にまで成長したことを、この人民広場ははっきりと示しているのである。

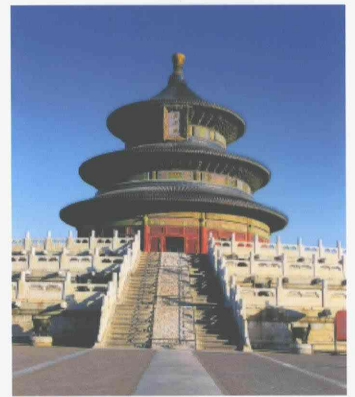


図 2-8 天壇
(<http://p2.iecool.com/show/94/6999.htm>)



図 2-9 太和殿
(<http://rishida.net/photos/sets/slides.php?set=sel-forbidden-city&slide=2>)



図 2-10 人民大会堂
(<http://photo.lvren.cn/11/index110655.html>)

2.2.2 創知天地

近年のマクロレベルでの都市再生といえば創知天地があげられる。創知天地は江湾体育館、創知中心(オフィス)、創知 SOHO(住宅)、科技园(大学等研究所)の4つからなり、総面積は約84万平米、建設投資額は約100億元という大プロジェクトである。この創知天地の中心となるのが1935年に建設された上海優秀歴史建造物にも指定されている江湾体育館である。江湾体育館について述べるにはまず大上海計画について述べなければならない。

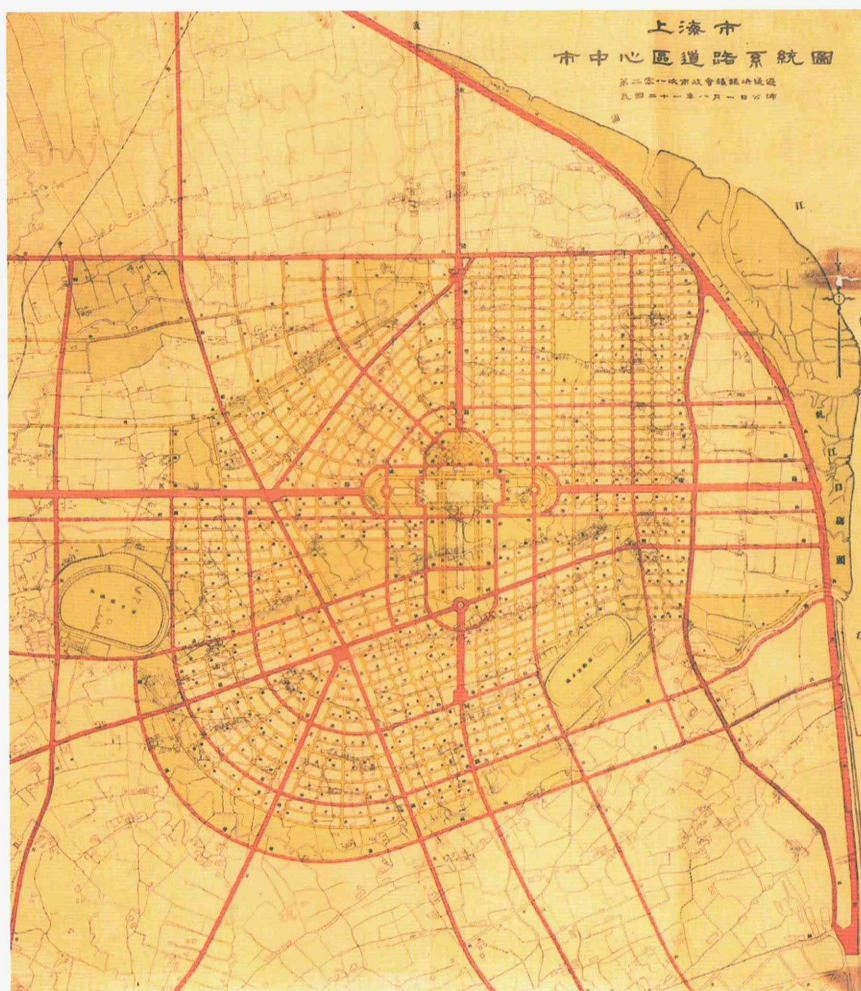


図 2-12 大上海計画図
(上海図書館『老上海地図』
上海画報出版社 2001.6)

大上海計画

大上海計画は1922年に孫文によって提唱され、1927年に成立した中華民国南京国民中央政府が主導した近代都市計画である。1920年代の上海は、列強各国の租

界への反発が強まり、中国ナショナリズムが台頭してきていた不安定な時局の中、その中心地であった。1927年7月、中央政府が組織した上海特別市政府の初代市長、黄郛は2つの市政建築構想を打ち出した。ひとつは租界の拡大を阻止するための環状道路の建設、もうひとつは呉淞開港と呉淞と租界の間に新市中心区域をあらたに建設するというものである。1929年には計画の中心機関である市中心区域建設委員会が組織され、すぐさま街区全体計画と上海市庁舎の設計を課題とする中央政治区設計コンペが行われた。このコンペの一等案を土台として、審査委員のひとりでありミネソタ大学に留学経験を持つアメリカ帰りの若き建築家董大西がデザインをまとめあげた。新市中心区域の街区は市政府庁舎から伸びる南北軸とそれに直交する東西軸で構成されるラテン十字型の中心街区構成をとり、主軸である南北軸に図書館、博物館など主要施設が並ぶ中華バロックともいえる街区構成となり、1933年に竣工した市庁舎の外観は中国の伝統的なデザインを強調している。まさに中国人による中国人のための都市上海を作り上げようとした中国ナショナリズムがデザインの面においても全面に押し出された都市計画であった。結局この大上海計画は主要施設と街区の一部分の完成をみたが、1931年の第一次、1937年の第二次上海事変の勃発により途中で頓挫せざるを得なくなる。現在、現存する完成までこぎ着けた一部の主要施設を中心に、計画範囲の中核部分が歴史文化風貌区に指定され保存されている。(図 1-10 参照)



図 2-13 江湾上海市庁舎



図 2-14 江湾上海市図書館



図 2-15 図書館から博物館を望む

南北軸をはさんで正対しているのがわかる

楊浦知識創新区

創知天地の位置する楊浦区は上海市の中心区域北東部に位置し、復旦大学、同済大学、上海財經など歴史ある大学や、科学技術研究機関が立ち並ぶ学術地区である。2003年、上海市政府は楊浦区の中心区域と黄浦江沿岸区域を大学地区、科技研地区、公共地区の三位一体をコンセプトとして《楊浦知識創新区發展計画要綱》をまとめた。同時にこの楊浦知識創新区の中核として創知天地の建設計画が始まった。2003年9月、市、区政府が組織する楊浦知識創新区投資發展有限会社と民間ディベロッパーの瑞安集団が共同出資した上海楊浦中央社區發展有限会社が成立し、創知天地の建設に向けて100億元が用意され、基本設計はSOM（Skidmore, Owings & Merrill LLP）が担当した。

創知天地—都市軸

では創知天地がどのような計画であるかを見ていこう。創知天地はオフィス区、住居区、科技研区の3つに分かれているが、まず注目されるのは大上海計画の名残であり上海市文物単位に指定されている江湾運動場を中核として再活用した点である。江湾運動場は董大酉設計、南北330m、東西175m、総敷地面積37500平方メートルで1935年10月に竣工した大上海計画において完成の日の目を見た数少ない遺物である。1954年に改修され1989年には上海市文物単位に指定されている。この近代建築遺産である運動場の保存・修繕を創知天地の建設と同時に行い、運動場西司令台の前面に5mほど掘り下げて広場をつくり、近接する



図 2-16 江湾体育场 1935
上、運動場
左、水泳場
右、体育館
(上海図書館『老上海地図』
上海画報出版社 2001.6)



図 2-17 創知広場

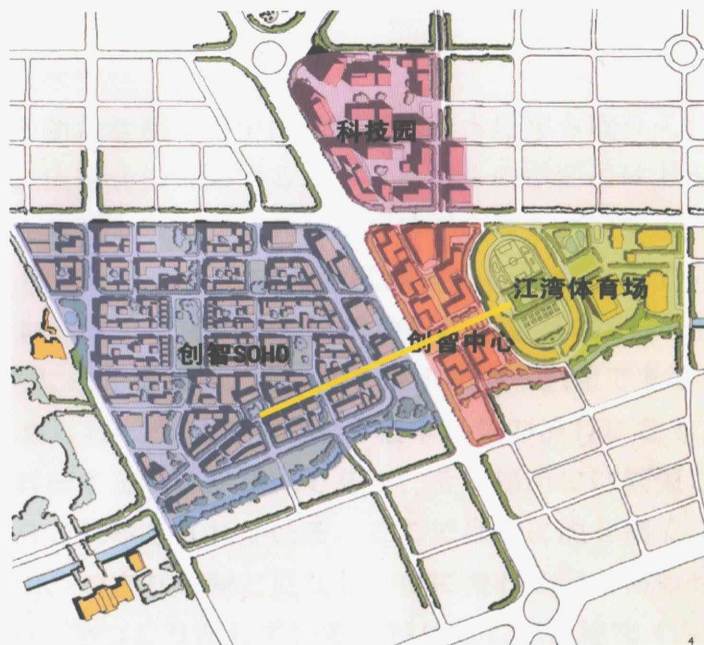


図 2-18 創知天地全体計画図
(『時代建築 2006-2』 同濟
大学出版社 2006.3)

淞瀘路と建設中の地下鉄に接続する。広場の南北には高さを抑えたオフィスビルが配置される。江湾運動場、広場と続く軸は淞瀘路を超えさらに西に伸び、住居区にまで伸びる。大学路と名付けられたこの軸はこの住居区に再開発前からあった街区構造を無視し新たにつくられたものである。この軸は創知天地の中心軸として計画の根幹となる。実際には軸線は淞瀘路に遮られ、動線計画としては住居区から広場に出るにはどうしても迂回せざるを得ない。つまり視線だけがこの軸をなぞることが可能なのだ。この軸線からなる計画が大上海計画を意識させていることは言うまでもない。江湾運動場の保存活用の視点から見てもただ建築単体で残されるだけでなく、新たな都市の軸の中に組み込まれる建設当初の意志までも残すというスケールの大きな保存活用と言えよう。

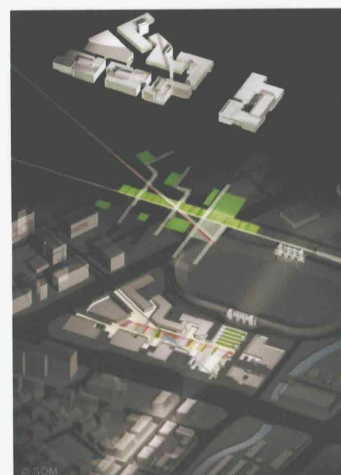


図 2-19 創知天地設計分析



図 2-20 住居区から伸びる軸

創知天地一風水

また、この新たな都市の中には伝統的風水思想も取り入れられている。広場北側に面するオフィスビルの壁面にはドットで龍が描かれ、このオフィスビルだけが広場に直交する向きで建てられている。そして計画区域南には川が流れている。風水においては「被山帶河」の地形構造を基本とする。つまり、後ろに山を背負い、前に河を帯すという思想である。山は龍脈をあらわし、龍脈は風水の根本、気の流れになる。その気が溢れ出すところが龍穴であり、その場所には繁栄と幸福がもたらされるとされている。ここでは逆に龍を描くことで建物を山、つまり龍脈と見なし、南に流れる河とあわせて「被山帶河」をつくりだしている。特にここでは建物（山）にぐるりと囲まれた広場であり、これは風水思想における理想的な『圍繞』の空間構造だという※。これにより広場に龍穴を人工的に作り出し、富と繁栄をもたらすよう計画されている。

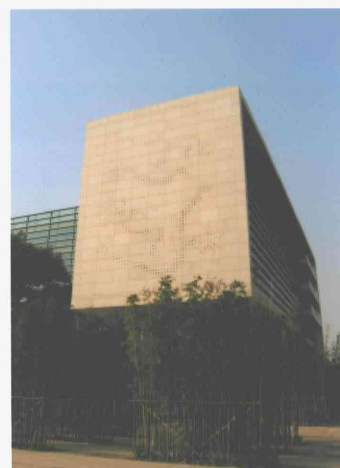


図 2-21 壁に描かれた龍

※黄永融『風水都市 歴史都市の空間構成』学芸出版 1999.4

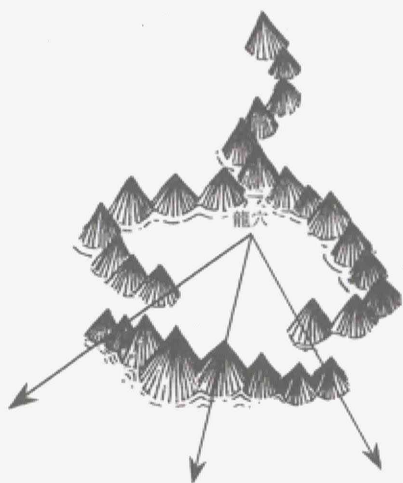


図 2-22 『圍繞』の空間構造モデル
黄永融『風水都市 歴史都市の空間構成』
学芸出版 1999.4



図 2-23 龍穴となる広場
右奥のビルの壁面に龍が描かれている

上海江湾体育场

上海江湾体育场は敷地面積20万平方メートル余りで運動場、体育館、水泳場の3つを主要施設として大上海計画において建築家董大酉設計で1935年10月に竣工した。その規模の巨大さは「目下極東に並ぶもの無し」(1936年《上海市年鑑》)といわれ、国内外の数々の重要なイベントの会場となってきた。しかし、歳月を重ねる中で幾度と無く改築され、痛みも激しくなりついには体育场としての機能を満たせなくなり荒廃していった。

ここでは楊浦知識創新区発展計画と創知天地の開発と同時に保存および修繕された上海江湾体育場の修繕行程と再活用方法をみていく。

保護および修繕行程

建築的価値

歴史的資料や調査から江湾体育場の3つを主要施設は以下3つの建築的価値を挙げることができる。

- ①中国近代史上、規模、機能、技術ともに最大、最先端である大型総合スポーツ施設群の遺構である
- ②ある特定の時期の文化、芸術、建築、都市の発展を表している
- ③機能的、経済的、文化教育的、政治的側面等、多方面で再活用できる可能性を秘めている

全体保存計画

上の基本的な建築価値をもとに文化財のオーセンティシティと完全性を具体的な形にまとめていかなければならない。また、今後活用するにあたって要求される機能、安全性の確保や建物の傷み、増改築に関する対応など文化財に対する肯定的な干渉は必要である。全体保存計画の項目の概略を挙げると

- ①立面の修復、細部の復元と全面的整備
- ②今後必要とされる機能を総合的に考慮し、一大総合体育场としての全体構造、機能、動線および空間を回復する
- ③現行の構造基準に従って全面的に構造的な補強をする



図 2-24 江湾運動場東司令台



図 2-24 東司令台内部

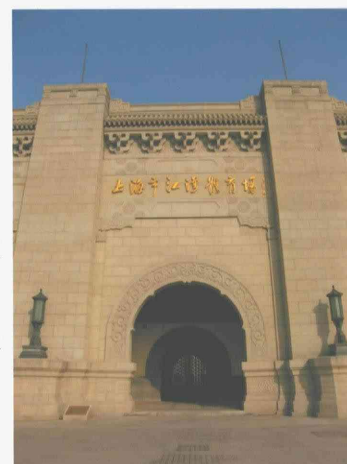


図 2-24 東司令台正面

- ④建築設備を全体的に現代の仕様とする
- ⑤文化財の価値である建築装飾、構造、材料および設備の修復保存は慎重に進め、細部まで復元する。
- ⑥新たな増築は要求される機能を満たす場合とする

文化財への干渉

江湾体育場は建設から70余年が経過し、長い歴史の中で荒廃した部分、増築された部分も多い。この問題をどう扱うかは慎重に検討する必要がある。具体的に例を挙げると1947年軍の火薬庫として使用していた運動場のスタンドの一部が爆発し消失した。1954年にその修復工事が行われ、同時に大きいイベントの際、グラウンドへの入場の利便性から新たに南門が増築された。1983年には北門も増築されている。ここで、完全に1935年建設当初の姿へ復元すべきかどうか検討が必要になる。

- ・南北門は競技会、セレモニーの進行を円滑にする
- ・重要な体育活動の証人である
- ・丹念にデザインされた記念門的立面形式であり、細部から全体デザインまで調和している
- ・すでに人々の体育場の印象として重要な要素となっている

以上4点から南北門の保存が決まり、使わなくなった電光掲示板の撤去や破損していた柱頭の修復が行われた。南、北門を保存修復したことで、「最も輝ける1930年代の姿を完全に取り戻した」という看板は掲げられなくなったが、歴史の積み重ねの保存はこの建築を生き生きと見せ、歴史の真実を物語ることができる。

1994年にサッカーのリーグ戦観戦ためにスタンド全面が8列増築された。これも対応が検討されたが

- ・原設計における全体的な動線構成を壊している
- ・視覚的に全体と差がはっきりしている
- ・今後これだけの観覧席は必要としない

以上3点からこの増築部分については排除し以前の状態に復元することが決まった。

このような価値判断の場面は建物保存の際、いくらでも出てくる。この判断の連続で作り上げた結果がこれからのこの

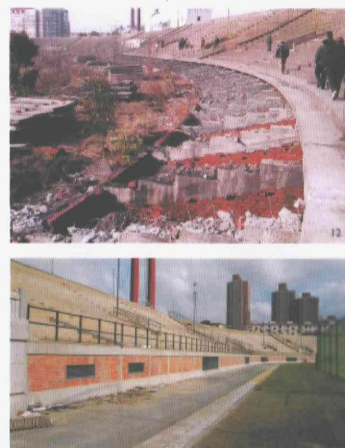


図 2-25
上、修繕前増築されたスタンド
下、修復後
『時代建築 2006-2』 同濟
大学出版社 2006.3)

建築のイメージになってしまう。文化財の基本的価値である歴史的オーセンティシティを重大に損ねる恐れを常にはらんでいることに注意しなければならない。

修繕技術

最終的に3つの主要施設の立面の80%以上、面積にして2000平方メートル超の外壁レンガの修繕をおこなった。新たなレンガの制作についてはまず様々な方法で作られた10種のサンプルを用意、比較し、基本的修復方法であるレンガ片による修復を決定した。さらに専門家の指導を修復に用いられるレンガ片は次の項目を満たすものとされた。

- ・新たなレンガ片は原材料と粘度をできるだけ近づける
- ・通気性も原材料に近づける
- ・弱アルカリとし、耐凍性、耐膨張性をもたせる
- ・原材料との間に有害な化学反応がおこらないようにし、最終的に無害な物質に分解されるようにする
- ・着色料は使わず、天然素材の配分で色彩をつくる

江湾体育场3つの主要施設のレンガ面は広大で、長い年月の間に幾度と無く不適切な修繕、塗装が行われ様々な色彩、質感があり、修繕に際して非常に高度な技術が求められた。最終的にメインの5色と35色の補足のレンガが用意された。レンガ壁の修繕行程は壁面の洗浄から、塗装を落とし、割れ目や重大な破損箇所には充填剤で処置し、2mm以上の破損が見られる場合は新しいレンガで修繕し、最後に全体に無色透明の防水性保護液を塗る。

伝統的技法と新素材

鑄鉄の大門、西司令台の細部装飾、雨樋やシャンデリアなど細部の修復では可能な限り伝統的材料と記号を使い、細部から全体まで独特の風格と統一性を取り戻した。完全に失われている部分は写真や図面、もしくは同時代の大上海計画のその他の遺構から調査、復元を試みる。

安全性、耐久性、その他使用に際して要求される部分は、外観を保存を前提としてすでに失われた部分においては新しい素材を用いる。



図 2-26 回廊

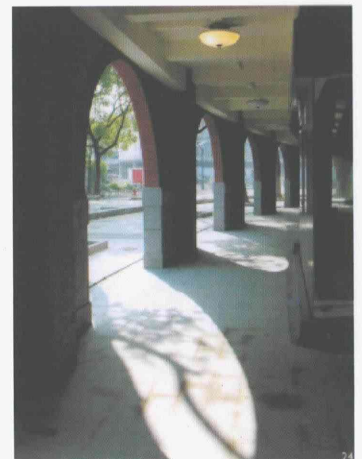


図 2-27 回廊内部
(『時代建築 2006-2』 同濟
大学出版社 2006.3)



図 2-28 回廊の利用

空間の再利用

建築の原空間の再利用はもともとの機能の拡大させ、文化財建築に新しい生命を吹き込む有効な手段のひとつである。江湾体育场運動場はスポーツ競技会やトレーニング機能のほかに、弱くなった大型競技場としての機能より市民のためのスポーツレクリエーション施設としての機能にシフトする必要がある。さらにスポーツ博物館、文化、商業空間を観覧席の下の1.2万平方メートルの空間を使い、新たに加える。運動場外廊内に商業店舗を増築するこの計画は、運動場のアーチが続くりズム感ある外観を壊すことないようにコントロールされている。2.1m幅を基準に全面ガラス張りの店舗が展覧席下に設けられた。連続するガラス面とスタンドへ上がるレンガ造の階段が交互に現れ緩急リズム感のある外廊に仕上がっている。増築された部分はスケール、材質、色彩、構造などにおいて既存部分の構成論理を乱すことなく全体調和をとり全体調和をとり、且つ新旧の素材の差を明確にしている。

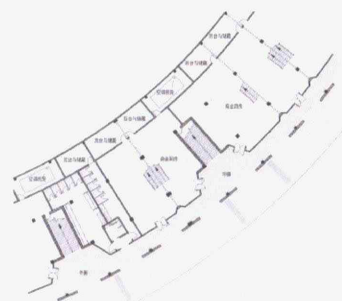


図 2-29 回廊平面図
(『時代建築 2006-2』 同濟大学出版社 2006.3)

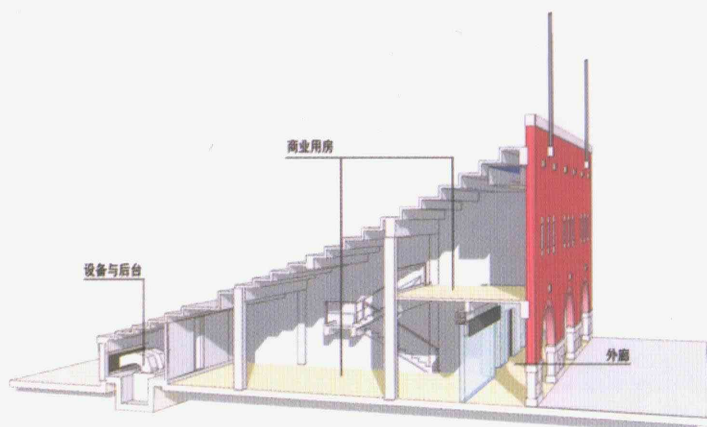


図 2-30 回廊断面図
(『時代建築 2006-2』 同濟大学出版社 2006.3)

興味深いことに約70年前、設計者の董大酉はこの運動場の再利用の可能性について言及しているのである。

「現状の設計においては観覧席下の空間は建設費の問題からその半分の利用にとどまっているが、いつか商業店舗空間が必要とされたとき、残りの半分を利用する準備はできている(※)。」

※董大酉 上海市運動場設計
概況
『中国建築 第二卷、第八期』
1934

2.2 メゾから見る都市再生—産業遺産の活用

2.2.1 M50

蘇州河

上海市街地を東西に流れる蘇州河は北外灘で上海の大動脈である黄浦江に合流する。蘇州河、黄浦江共に蘇州市の太湖を源流にもち、いわば兄弟である。黄浦江は金融、貿易、造船など大規模な商工業の中心として上海の表の顔といわれるなら、蘇州河は食品加工、紡績、製紙などの工場が建ち並び工業の中心として上海を支えてきた裏の顔である。しかし、工業廃水、生活排水で蘇州河は徐々に汚染され、さらに時代の流れで工場機能は広い郊外に移り、工場建築だけが残されていった。1996年、上海市政府は上海開港以来最大の環境改善工事である《蘇州河環境総合整治工程》を始動させた。期間10年、200億元以上をかけ、水質の改善、沿岸の景観整備など17項目から蘇州河を再生させるというプロジェクトであった。

産業遺産と芸術

経済発展が加速的に進み、市全土が再開発で沸いていた1998年、台湾人建築家登琨艷は蘇州河に残された工場跡のひとつにアトリエを構えた。これが蘇州河の産業遺産利用の始まりであった。

「私がアトリエとして借りたのは二階と三階で併せて2000平方mほどのアールデコ様式の木骨レンガ造の倉庫で、入り口の上には1933と書かれていた。ここら辺の住民にこの倉庫は昔あの有名な杜月笙の穀物倉庫であったことを聞きより一層ここが気に入った。なぜなら、『目の前を流れる蘇州河の川岸にあった埠頭に舢舨が着き、荷物を担いで道を渡り、倉庫の階段を上がっていく姿が映画のように頭の中に広がっていく...』そういう時間を超えたイメージが目の前に浮かび上がるからである。」(※)

登琨艷の頭の中にはニューヨークのSOHOのイメージがあり、いつかあのように大型の倉庫を自分のアトリエとして改



図 2-31 登琨艷アトリエ

※『中外建築 2006 年第 1 期』
2006.1

築したいと思っていたと語っている。そして登琨艷以後、彼に共感した建築家やアーティストが相次いで蘇州河沿いの倉庫をアトリエとして借り始める。こうした芸術家たちの行動は市政府が進める《蘇州河環境総合整治工程》にも少なからず影響を与えた。

新・蘇州河環境総合整治工程

1996年から始まった《蘇州河環境総合整治工程》は2000年には蘇州河の環境の改善が見られ始めた。芸術家たちの古い倉庫の利用などで蘇州河の文化的評価も高まり、蘇州河沿岸に開発された高層マンションの値段は上がり、平方m当たり3、4000元だったものが10000元以上に跳ね上がっていた。初めの計画ではディベロッパーの利益を優先し一般的住居区の3、4倍の容積率が定められていたが、こうなると30階建て、高さ100m超のマンションが建つことになる。蘇州河の川幅や平均約50mであるからまさに峡谷のようになる。



図 2-32 蘇州河マンション群

2001年初め、市政府は蘇州河開発工事を一時停止し新計画に着手した。2002年に再編された新計画方案は「住民の居住・生活、憩いと観光」を主軸に置いた。新計画法案は外灘から中山西路まで13.3kmの河川兩岸1、2ブロックを対象とし、その計画範囲は7.5平方kmにおよぶ。新法案の基本スタンスは「両増一減」つまり緑と空間を増やし容積を減らす、であった。そして決定された蘇州河開発計画は「人文性、生態性、景観性」の3つの特質と備えていた。そこで注目されるのは人文性である。この新計画方案で市政府はもともとの蘇州河沿岸の28の保護建築にさらに20余りをリストに加えた。この中には登琨艷のアトリエとなった倉庫を含まれており、彼のアトリエは解体を免れることになった。



図 2-33 登琨艷アトリエ外観

西蘇州路1131号・1133号倉庫

西蘇州路1131号・1133号倉庫は1932年建設、イギリス人が設計した一棟二層の赤レンガの倉庫で、もともとは東南米工場の倉庫であった。2000年6月、画家丁乙がここにアトリエを構えたあと、スイス人Lorenzの香格納



図 2-34 西蘇州路 1131 号・
1133 号倉庫外観
(韓好齊 張松著『東方的塞納左
岸』上海古籍出版者 2004.5)

画廊、東廊画廊 (EASTLINK GALLERY) や画家の陳墻などの芸術家たちが次々と入ってきた。日 1 平方 m 当たり 0.3 元だった賃料も 0.6 元になるほどその知名度も上がり、2002 年 2 月にはフランス文化部長とフランス大使もこの芸術倉庫を訪れた。2000 年の上海トリエンナーレでは第 2 会場として芸術家倉庫になり、海外メディアにも取り上げられるほど有名になっていたが、《蘇州河環境綜合治理工程》によって近い将来取り壊され、緑地と幅員 26m の道路になり、ディベロッパーがその後ろに高層マンションを建てるという計画が決まっていた。

2002 年 2 年、上海市政府から蘇州河開発計画により倉庫の取り壊しに関する通知がもたらされた。この芸術家倉庫の現所有者である上海市飼料公司の親会社良友グループはすでにこの土地を開発業者に明け渡す契約をかわしており、契約により 6 月 30 日までに退出する通告を受けていたがいつこうに出て行かない芸術家たちに、開発業者は良友グループに対し決済の停止を通達した。良友グループはすぐさま電気と水の供給を止めた。

当時、ちょうど上海に来ており、この事情を知った上海生まれの画家陳丹青は、ニューヨークの SOHO がどのように形成され発展し、SOHO の問題が社会レベルで討論され、最終立法府の懸案にまでなり、今日全世界に影響を与え大きな経済効果ももたらしめているということを上海市市長陳良宇に陳述した。

上海市政協委員の産壯志は蘇州河芸術倉庫の保存を早くか



図 2-35 西蘇州路 1131 号・
1133 号倉庫内部ギャラリー
(韓好齊 張松著『東方的塞納左
岸』上海古籍出版者 2004.5)

ら訴えていた人物である。上海大学通信学院副院長でもある彼は2002年初、上海市政協會議上で蘇州河沿岸の芸術倉庫の保存を提案した。4月28日産壯志の提案要求により、上海市計画局、蘇州河綜合治理室、市計画設計院など関連部門が芸術家倉庫について調査検討し始めた。調査検討の中で専門家は、アーティストたちの活動の場として人文的価値の高さは認めたが倉庫単体の建築的価値は特別な物ではないと判断した。

開発計画の中で芸術家倉庫付近には「夢清園」という緑化公園が計画されていた。丁乙は芸術家倉庫を保存と政府の開発計画は相対せず夢清園と呼応すると述べた。ここに遊覧船、船着き場を設けて、船からの景観を楽しみ、岸に上がって見学することもできれば蘇州河観光の目玉になり、商業的開発にもプラスになると考えた。

保存に向けて芸術家たちはいくつかの案を出した。

ひとつは芸術家たちが半分、投資会社がもう半分を出し、ディベロッパーからこの倉庫を買い取るという案。しかし、この倉庫の敷地内の価格は700万元であったが、この価格はディベロッパーが到底納得するような物ではなかった。

次の案はディベロッパー自身が倉庫を保存し、アーティストたちの継続使用を認めるというものであったが、賃料が大幅に上がらざるを得ないためこの案も現実的ではなかった。

もうひとつの案は上海市観光事業管理委員会にこの土地の購入の出資をしてもらい、画廊などとともに文化観光事業の総合事業とするものであった。上海市観光事業管理委員が倉庫を訪れたが結局腹案に過ぎないということで正式には提出されなかった。

2002年4月西蘇州路1133号倉庫の東廊で最後の展覧会が開かれ、2002年9月、ついに解体が始まった。



図 2-36 解体された西蘇州路1131号・1133号倉庫
(韓好齊 張松著『東方的塞納左岸』上海古籍出版者 2004.5)

M 5 0

画家薛松はもともと西蘇州路1131号倉庫に魅せられてそこにアトリエを構えていたが、風通しが悪いのがネックであった。彼の絵の一部は焦げを用いて制作していたので換気の悪さがアトリエに向いていなかったのである。そして、2000年5月11日、1999年にすでに操業を停止していた莫干山路50号春明工業園區にアトリエを構えることになった。これがその後上海最大の前衛芸術家たちのアトリエになる莫干山路50号芸術倉庫(M 5 0)の第一号であった。

2002年5月、西蘇州路1131号・1133号倉庫を失った芸術家たちは莫干山路50号春明工業園區に移り始めた。同年、淮海西路720号倉庫も同様に市政府によって撤去され、そこに住んでいた芸術家たちもまたここ莫干山路50号に引っ越してきたのである。こうして、10数人の芸術家と3つの画廊が集まる莫干山路50号、通称M 5 0が誕生したのである。2002年には上海經濟委員会から上海春明都市型工業園區と命名され、工芸美術、服飾デザイン、広告デザイン、展覧会計画など都市型の産業の中心として認められた。2005年には第一次上海創意産業聚集区に指定され、M 5 0創意園と命名された。



図 2-37 莫干山路の工場
緑部分が信和紡績工場で、現在の莫干山路50号
赤部分は阜豊面粉工場、黄部分は福新面粉工場この二つが合併して上海面粉工場となる
現在の莫干山路120号
(韓好齊 張松著『東方的塞納左岸』上海古籍出版者 2004.5)

莫干山路地区の芸術倉庫

莫干山路地区の工場群は、1900年、列強の租界が拡大していく中で孫一族がこの蘇州河のほとりに阜豊機械面粉工場を建設したことに端を発する。これは上海に置ける中国民

間資本家の第一号であった。阜豊機械面粉工場の西隣には少しおくれて1913年無錫の有名な資本家榮兄弟が福新面粉工場を建設する。1920年代半ばには中国最大の製粉製粉工場になり、1956年公私合営により、両社は合併し、1966年上海面粉工場と名を変え、住所も莫干山路120号となった。現在も1930年代までに建てられた8階建ての鉄筋コンクリート造の工場、クイーンアンスタイルの4階建ての工場、古典主義のオフィスなどがあり、現在も残っており第三次優秀歴史建築に指定されている。



図 2-38 福新面粉工場オフィス

莫干山路50号の総面積は、23,500平方mで、蘇州河沿岸に位置し、敷地内には1937年から1994年までの各時期に建造された工場が立ち並んでいる。この工場は、もともとは綿花倉庫であったこの場所に1937年周志俊が工部局から土地を買い足し信和紡績工場を建てたことに始まる。1966年に上海第十二毛紡績工場と名を変え、1994年に上海春明毛紡績工場となった。1999年にその稼働を停止し、2000年、大きく機能を変え、新しい歴史が始まった。

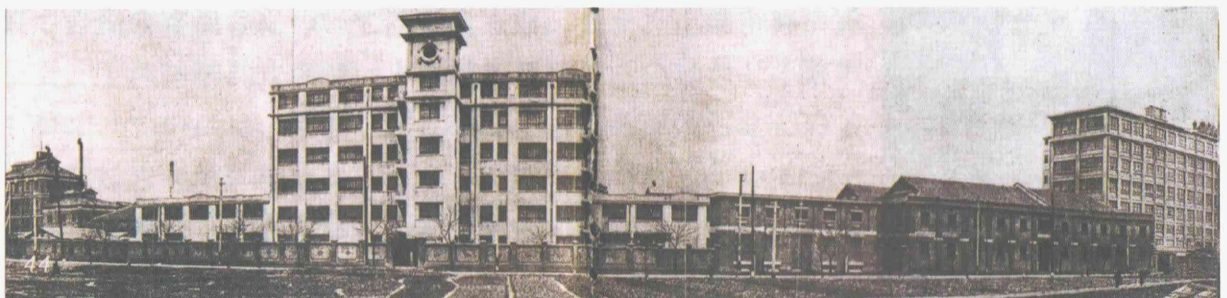


図 2-39 蘇州河から写された往時の莫干山路
(韓好斉 張松著『東方的塞納左岸』上海古籍出版者 2004.5)

莫干山路一帯の保存

2002年9月、上海応用技術学院城市文化研究所准教授の韓好斉は莫干山路50号にアトリエを構え、莫干山路50号上海春明毛織物工場の建築的調査を始めた。2003年9月、国家文化部の全国芸術科学計画課題に申請し、同時に写真や各種資料の収集を始め、工場長に許可を取り工場の取材を行い上海資料館、都市建設資料館、図書館で莫干山路50号に関する資料集めを実施し、現在周辺に在住している地域

住民に訪問取材も行った。また、上海春明と寅富工場の工場長とともに調査を実施し、そこで、現存する民間資料を入手することに成功した。調査グループの一員である上海師範大学芸術学学院副学長魏劭農を伴い、撮影と取材を行った。

莫干山路120号の保存

SARS 問題で騒然とする世間を尻目に調査は続けられたが、調査開始から10ヶ月が過ぎた2003年7月12日、調査を続ける中で莫干山路の優秀歴史建築が取り壊しの危機に直面していることが発覚した。莫干山路120号上海面粉工場の3棟の優秀歴史建築が二週間以内に取り壊されるという物であった。調査グループは緊急に莫干山路保護のため、資料や論文を整理し、4つの論文と上海の文化地区と莫干山路を分析した資料などで「蘇州川南岸の莫干山路における近代工業建築群保護利用計画の実現性の報告」を作成した。上海応用技術学院鄭惠強副院長、黃貽平教授の推挙で同済大学の専門家の協力を得ることになる。7月18日報告書を市政府に提出。7月23日、韓好斉、都市計画局の趙天佐、同済大学副教授張松、楊幼飄、魏劭農、「文汇报」の洪崇恩らは計画局で産業建築保存について話し合った。また、上海市経済委員会、上海紡績株式会社、上海華宇毛麻株式会社などの協力も得て、ついには、解放日報、新聞午報、新聞晩報などのメディアに大々的に取り上げられるまでになった。そしてついに解体寸前だった歴史的建築が奇跡的にも保存されることになったのである。

これからのM50

蘇州河の流れのごとく紆余曲折経て2005年、M50創意園として上海屈指の芸術家倉庫群となった。国内外から高い評価を受け、整備も進み今では20カ国以上140余りのアトリエや画廊、企業が集まっている。保存された莫干山路一帯を整備し芸術家倉庫、親水緑化公園、博物館、美術学校を併せた文化拠点をつくるという計画も進んでいる。

だが同時に新しい問題もわき出している。それは手本としたニューヨーク SOHO と全く同じジェントリフィケーションの問題である。2005年創園時にM50にアトリエを構

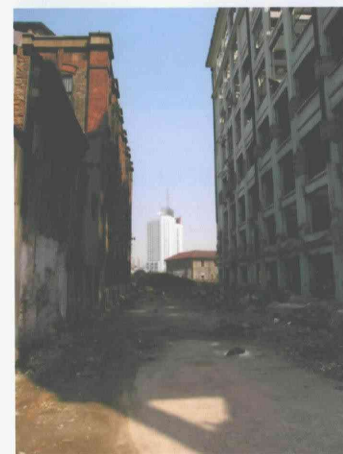
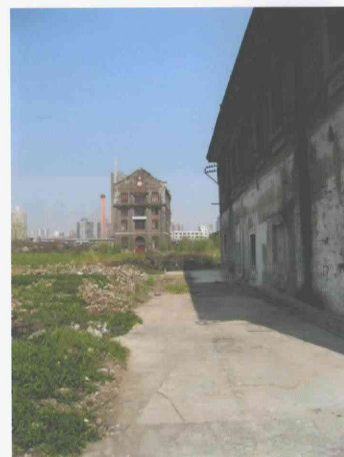


図 2-40,41,42
解体を免れた莫干山路120号の建物

えていたのは40程度であった。そしてわずかな広告設計の会社を除けば、そのほとんどが画家であった。しかし3年余りで140にまで増えた中には商業的な企業が多く見られるようになった。特に深刻なのは賃料の高騰である。はじめにアトリエを構えた薛松は1平方m当たり日に0.3元ほどであった。それが2005年の創園時に1.2元、2008年には2.5~3元になり、わずか8年で賃料が10倍になってしまっている。このためM50にアトリエを構えるまだ名の知れていないアーティストは、作品が売れなければ経済的な圧力ですぐ出て行かざるを得なくなる。現在大家と借主の契約は一年更新であり、これが賃料高騰の原因であるという声もある。事実、もうすでに何人かの芸術家がここを離れ始めている。新しい段階に入ったM50はこのまま商業の波に飲みこまれていくのか、それとももう一度初心に戻りM50創意園としての質を維持し続けていくのだろうか。



図 2-43
M50 No.16 香格納画廊
1940 年建築



図 2-44
M50 No.21 1938 年建築



図 2-45
M50 芸術倉庫平面示意图
(韓妤齐 張松著『東方的塞納左岸』上海古籍出版者 2004.5)

2.2.2 夢清館

上海を東西に流れる蘇州河は工業都市としての近代上海を支えてきた重要な河川である。工場が建ち並び蘇州河を行き交う船でにぎわいを見せていたにぎわいを見せていた。しかし改革開放後、急速に経済発展を遂げてた上海の工業は高い生産性を求め郊外の広い土地に移転していき、蘇州側沿いの工場はその機能を停止していった。2001年に批准された《上海市城市総体規画1999-2020》内の重点地区計画に蘇州河の環境改善と兩岸の再開発がもりこまれ、1999年にはすでに蘇州河の水質を改善事業が始まっていたが、すでに衰退していた工業区を居住区、商業区などに再開発し生活環境改善する計画がたてられた。

上海ビール工場

上海ビール有限公司は1930年代のビール製造会社で、「UB」、「上海ビール」などの商標名のビールを年間約3万トン製造していた東アジア最大のビール会社であった。上海ビール有限公司上海ビール工場（以下上海ビール工場）は蘇州河南岸に位置し、東に江寧路、西に昌化路を望み、南側は宜昌路に接している。この建築群は近代上海で活躍したスロバキア人建築家L・ヒューデック（Ladislav Hudec）設計で1934年に建てられたものである。醸造場、ボトリング作業場、オフィスの三棟は1999年に批准された第三次優秀歴史建築に指定されていた。

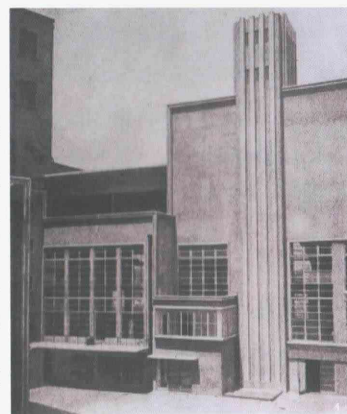


図 2-46 上海ビール工場
（『時代建築 2006-2』 同済大学出版社 2006.3）

解体—保存

2002年初頭、上海市政府は蘇州河の第一期環境改善工事の完了に併せて、U字型の川筋にあった上海ビール工場跡地をビオトープの緑地公園に再開発する計画をたて、緑地公園の建設は市政府が組織した上海市蘇州河総合整治建設有限公司が請け負うこととなった。この夢清園と名付けられた緑地公園の計画によれば上海ビール工場内の建物は全て解体し、代わりに展示館が中国伝統的様式で建てられるといものであった。

そして解体作業に着手しようとしたとき知らせを聞いた上海市都市計画局は局長自ら現場を視察し、即座に解体工事の中止をさせ、すぐさま専門家による検討会を開いた。都市計画局局長と副局長の伍江、同済大学の羅小未教授と阮儀三教授などの専門家が集まり、同済大学建築都市計画学院に緑化公園の建設も併せての計画の基本設計を委託した。

2003年2月、同済大学の現地調査が行われたとき、70年近い歳月を経た上海ビール工場はすでに荒廃し、オフィス、ボトリング作業場、醸造場以外の建物はすでに消失していた。醸造場のメインの構造体には亀裂が走り、醸造場とボトリング作業場の鉄製の窓枠は全て失われていた。もともとの設計図もすでに失われ、復元は非常に困難な状況であったが、幸い上海市の図書館に1942年に発行された上海ビール有限公司の創立25周年記念刊が保存されており、当時の工場の全貌が写真で掲載されていた。各建築の外観、内部空間、内部の生産空間、生産設備、蘇州河を利用した賑やかな運輸の情景すら伺え、参考資料としてはとても優れたものであった。

2003年3月、上海市都市計画局は各局関係者と、有識者を集め、緑化公園夢清園を含めたこの計画についての研究と検討を話し合った。この計画の論点は上海ビール工場の建築群の保存と夢清園建設の相互関係である。

解体を主張する側の意見は

- ・政府はビオトープ緑化公園の建設のために大量の資金を投入しており、解体撤去すれば緑化面積が大幅に増える
- ・醸造場のような巨大な建造物は周辺からの夢清園に対する美観を著しく損なう
- ・インターナショナルスタイルを基調としたデザインであるこの工場群は情感に欠け夢清園の景観を損ねる

文化財保護の視点、且つ現状の撤去作業状況の進行を考慮した結果、最終的に折衷案を採ることになる。それは、上海ビール工場の醸造場、ボトリング作業場の保存を前程とした修繕と再利用を進めるというものであった。

具体的には

- ・ボトリング作業場は上海蘇州河展示センター（夢清館）



図 2-47 解体中の上海ビール工場
（『時代建築 2006-2』 同済大学出版社 2006.3）

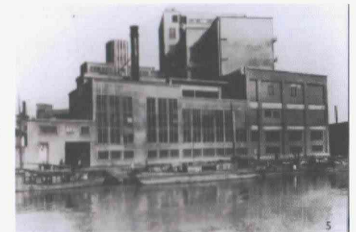


図 2-48 蘇州河から見た上海ビール工場、1930 年代
（『時代建築 2006-2』 同済大学出版社 2006.3）

として利用することを前提に保存修復する。

- ・醸造場は蘇州河沿いの一面保存しビールバーにする。その他大部分は解体撤去し景観広場をつくる。
- ・オフィスについては日を改めて再度検討する。

というものであった。

現状の実測図、資料写真などのベースとして、同済大学建築設計研究院が醸造場、ボトリング作業場の保存部分の修復計画の基本設計を担当し、上海市房屋建築設計院有限会社がそれに応じて施工図を作成した。景観の全体設計は上海市園林設計院が担当することになった。



図 2-48 Laszlo Hudec
(<http://students.washington.edu/lrh/hudec/index.html>)

建築的価値

上海ビール公司工場の設計者L・ヒューデックは上海近代建築界に多大な影響を与えた人物である。1893年にスロバキアに生まれたヒューデックはブダペスト大学で建築を学んだ後、20代前半の若さで上海へ渡った。1925年に独立して事務所を構えたヒューデックは1945年に上海を離れるまで数々の作品を残し、現在でもパークホテル、グランドシアター、フベルトゥスコート、呉同文邸など優秀歴史建築に指定されている現存作品も多い。その様式は時代を反映して、修業時代の1920年代の新古典主義、1930年前後のアールデコから1935年前後のインターナショナルスタイルまで幅広い。1934年竣工の上海ビール工場は、やはりその時代を反映してインターナショナルスタイルを主体にアールデコの細部装飾を加えている。

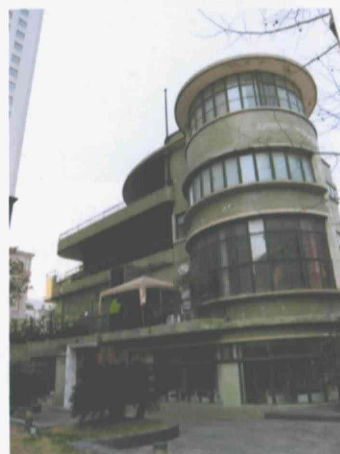


図 2-49 呉同文邸 1933 建築

ボトリング作業場は一階のフラットスラブとマッシュルーム・コラムを採用した空間やカーテンウォールなどインターナショナルスタイルの特色が強く出ている。南側で接する宜昌路の曲線に合わせて設計され、北側コーナーの処理とともにヒューデックの好んだ曲線のデザインも強く見られる。



図 2-50 ボトリング作業場

醸造場は東側に簡易的な装飾が施された塔が立っている。これは内部の機能とは直結しておらず、単に装飾的な物である。また建物の縁をとる装飾などアールデコの意匠が見られる。



図 2-51 醸造場

オフィスは外部全体の意匠は簡素なアールデコ様式であるが、内部空間は扁平アーチやヴォールトになっており、手す

りやドアノブなどの細部デザインにまでアールデコの濃密な意匠が現れている。

基本改修内容

- ①醸造場、ボトリング作業場の2棟に関して現状実測図をもって保存の第一資料とする。
- ②2棟の構造の検査と今後の機能に対応して構造の強化し安全性を確保する。
- ③娯楽、休憩、展示、オフィスなどへの機能の転化。それに対応する設備の設置。
- ④現存部分の立面の復元と、周辺施設の解体で新たに生まれた立面の設計。
- ⑤蘇州河からの夜間の景観を考慮し建物種編をライトアップする建物種編をライトアップする。



図 2-52,53 オフィス外観および内部

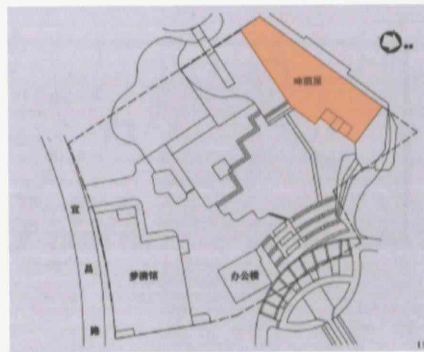


図 2-54 左が改築前、右が改築後
色のついている醸造場が大きく削られたことがわかる
『時代建築 2006-2』 同濟大学出版社 2006.3)

細部処理

①ボトリング作業場

内部動線の改善。

二基のエレベーターを設置。

昌化路から直接2階主要空間にアクセスできるよう、一部2階床面を取り壊し、鉄製階段を増築する。

展示室、接客室、機械室以外の1階の壁は撤去し、夢清園との間にスムーズな視覚効果を得られるようにし、両者に一体感を出す。

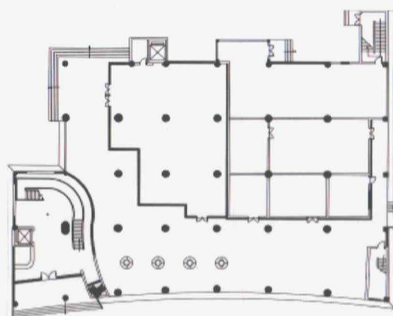


図 2-55
ボトリング作業場 1F 平面計画図
基本的に周囲に壁のない開放的なプランになっている
(『時代建築 2006-2』 同済大学出版社 2006.3)

②醸造場

醸造行程に従って機能的につくられており、大空間から無駄のない小空間まで内部空間は変化に富んでいる。保存部分の修繕では、可能な限りこの空間特性を保存する。

場内に残る醸造作業用の煙突は全体的に保存する。部分的解体で現れた断面には、全面ガラスのカーテンウォールで覆い、視覚上で既存部分との差を明確にする。

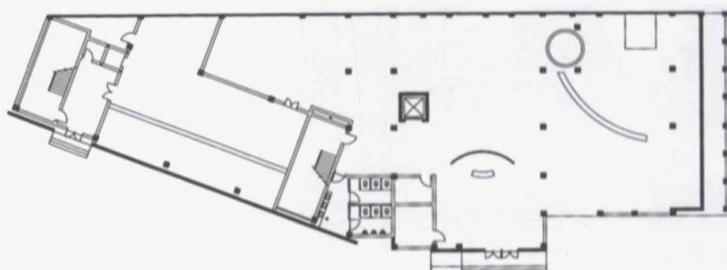


図 2-56
醸造場 1F 平面計画図
削られてあらわれた新しい断面は全面ガラス張りになっている
右隅の四角は保存された煙突である
(『時代建築 2006-2』 同済大学出版社 2006.3)

色彩処理

壁面の破片から剥離した塗装を分析したが、長い年月の間に新旧の塗装が一体となっており、写真も白黒であるため元の外観の色を復元することは不可能であった。分析結果を踏まえて検討した結果、最終的にはインターナショナルスタイルの典型的な色彩である白色と濃い灰色の外壁塗装を新たに吹き付ける。

建具処理

オリジナルの窓、門などの建具はすでに取り外され失われていたため、写真等を参考にスチール枠を用いて可能

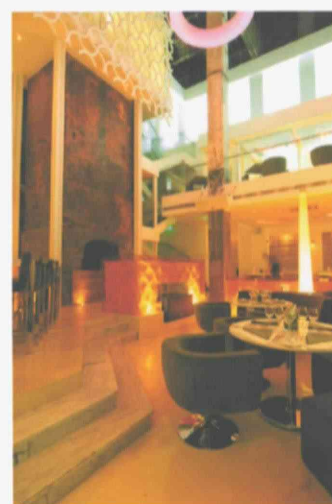


図 2-57
醸造場 1F レストラン mimosa

な限り原型に復元する。

夢清園の現状と今後

復元改修された旧上海ビール工場のボトリング作業場は蘇州河の歴史・環境展示館として一般に公開されはじめ、醸造場は PIER ONE（一号埠頭）と名を変え、バー、レストラン、ホテルとして利用されている。PIER ONE に隣接する蘇州河沿いには実際にピアが設けられ、会員制ではあるがボートで蘇州河をクルージングすることも可能になっている。緑化公園、夢清館、PIER ONE とピアの 4 つを併せた夢清園は蘇州河の再生の核となることを期待されている。



図 2-58
醸造場 1F レストラン mimosa
見上げ



図 2-59 ピア

2.2.3 19参Ⅲ老場坊

19参Ⅲ老場坊は外滩から1.2kmのほど離れた虹口区沙涇路と栗陽路の交わる場所、沙涇路10号・20号の2ブロックにまたがる。改築前は使い古された安い倉庫として使用されている程度であり、都市発展には無用で、経済的にも停滞している地域であった。発展が停滞している地域に活力を注ぎ込む必要性は都市発展の過程の中でどうしても直面する課題である。

19参Ⅲ老場坊の開発目的として、上海の歴史的産業遺産を保存すると同時に、文化財としての建築がもつ価値をさらに拡大させ、新しい文化の発信地であり新しい産業形態でもある上海創意産業聚集区として都市に活力を注ぎ込む核となることが求められている。ひいては上海の新しい顔にまで成長することを期待されている。

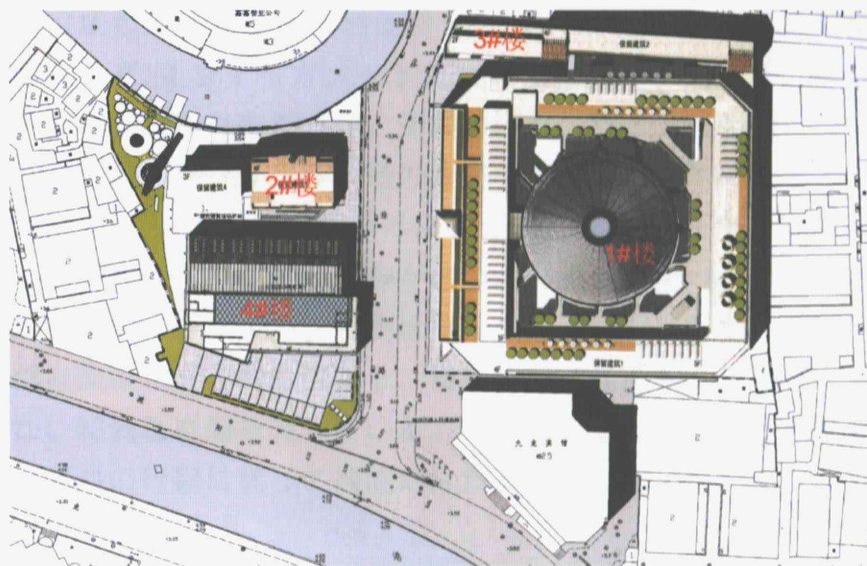


図 2-60 19参Ⅲ老場坊配置図
(『建築与文化8』中国出版集团
2007.8)

沿革

19参Ⅲ老場坊は4棟の保護建築からなっている。その内2005年に実施された第四次優秀歴史建築で指定を受けた2棟が19参Ⅲ老場坊の中核をなしている。ひとつは共同租界における工部局(共同租界の中心機関)屠殺場であり、もうひとつはその処理施設であった。残りの2棟は前者屠殺場の補助施設として建てられた建物と、1960年代に建てら

れた倉庫である。

1930年代の上海は租界地の発展にともなう急激な人口増加により食肉供給の重要性が増してきていた。当時の屠殺場は規模もきわめて小さく、且つ各地に分散していた。そこで工部局は虹口湾近くの沙涇路に12000平方メートル以上の用地を確保し、393万元の資金を以って新しい屠殺場の建設を始めた。建設は1931年に開始され、1933年11月に完成した。イギリス人建築家バルフォース(Balfours)により設計され、余洪記營造廠が施工したこの屠殺場は、1934年1月から利用が開始された。



図 2-61 工部局屠殺場
(『建築与文化8』中国出版集团
2007.8)

完成した屠殺場は敷地面積8,677平方メートル、建築面積29,491平方メートルという規模で、東洋一の屠殺場といわれるものだった。屠殺の行程に従って機能的に設計された鉄筋コンクリート造の建築である。平面的に見ると外周をぐるりと口の字形の外周棟が囲み、囲われた中心には24角形のメインの中心棟が建つ。外周棟は南・東側が牛舎、北側が豚、羊、子牛、西側は屠殺加工につかわれていた。内部空間は三次元的に広がり、複雑な回遊性をもつ他に例を見ない特異な空間を有している。この複雑で迷宮のような空間は屠殺の行程に従って機能的に設計されたために生まれたものである。

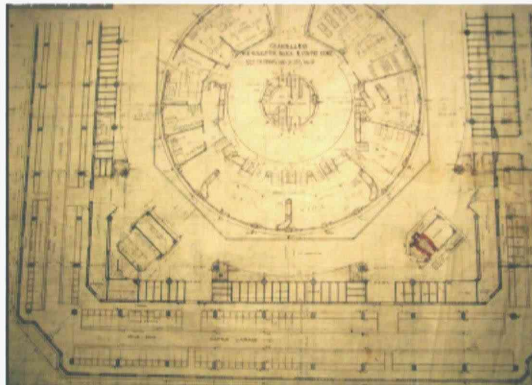


図 2-62 工部局屠殺場設計図
上海市档案館蔵

屠殺の作業ラインは2 km に及ぶものであったという。記録によればその工程は次のようなものであった。トラックに寄せられ運ばれた牛や豚はまず1、2日の休息を取る。そこで死の恐怖におびえることなくリラックスして過ごすことで、体内から毒素を排出させる。この措置は単に博愛的であるばかりか食肉の品質を向上させる効果があった。翌日、家畜は隊列を組んで屠殺場一階に入る。家畜は高い塀に囲まれたスロープを静かに上がっていく。スロープにはセメントでいくつも溝が掘られた滑り止めが施されている。2、3階は加工処理場になっており、そこで家畜は電気棒を押し当てられ昏睡状態になる。知覚を奪われた家畜は即座に作業ライン上に吊るされ、ベルトコンベアーで運ばれる。最初の処理は屠殺主任による解体である。選ばれた優秀な技術者であった彼らは最小限の切開で血液を抜き、その後切断、肉の種別処理、排骨、洗浄という長い行程が清潔且つ迅速に行われていたのである。

1935年、病気の家畜、不要な肉、内臓、毛などを処分するために構内の一画に処分場が設けられた。廃棄処分の設備も非常に機能的であり、利用可能な油脂分は蒸気で抽出し、産業用油として工場に送り、石けんなどに加工された。その他不要な部位はすべて消却され高い煙突から煙を出し、周囲の環境への影響を最小限にする工夫もなされた。

しかしこれらの施設は社会の発展にともなって1970年にその屠殺場としての使命を終えることとなる。その後、生物化学、薬品工場として再編されるが2002年には完全に操業を停止した。

建築的価値

1931年に建設が始まり、1933年に竣工した旧屠殺場は当時最先端のデザイン、構造技術、そして他に例を見ないほど特異な内部空間をもっている。

建物正面の西側立面はプレキャストコンクリートで装飾されたカーテンウォールであり、オーギュスト・ペレのル・

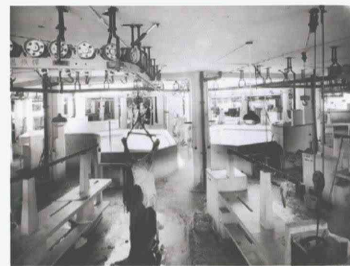


図 2-60 工部局屠殺場
（『建築与文化8』中国出版集团
2007.8）



図 2-61 処分場

ランシー教会を彷彿とさせる。ル・ランシー教会の竣工が1923年であり、旧屠殺場の計画が1931に始まっているからわずか8年で最新の鉄筋コンクリートによる表現は上海にたどり着いていたことになる。アジアの極東である日本には1937年にアントニン・レーモンドが東京女子大学礼拝堂でル・ランシー教会を参考にプレキャストコンクリートでの装飾を使っているが、これを見てもアジアにおける先駆的な作品であったといえよう。また、この西側立面の一層目は吹き放しになっており、八角形の断面をもつ側柱は、全体の1/4ほどを占める柱基の上部から柱頭の上部まで徐々に広がっていき、柱基・柱頭も他にはない独特の意匠である。西側立面の中央部を縁取る緩やかな曲線や列柱上部のアーキトレーブを波形に処理している点、メダリオンのデザインなどとともに表現主義の影響を感じさせる意匠である。

構造的にはフラットスラブに八角形の断面をもつマッシュルーム・コラムという鉄筋コンクリート造の最新の構造も用いられており、西側の加工処理場でその機能的でありながら美しい空間を味わうことができる。

その特異な内部空間は屠殺の工程に沿って螺旋スロープで上下が結ばれ、さらに外周棟と中心棟が橋梁でいくつも結ばれている。中心棟内部も外側の構造体と中心構造体の間にたくさんの小さな橋梁が飛んでおり、全く複雑で迷宮のような魅力的な空間になっている。



図 2-62 西側外観



図 2-63 マッシュルームコラムとフラットスラブ



図 2-64 西側立面側柱



左図 2-65 外周棟と中心棟を繋いでいる橋梁

右図 2-66 中心棟外部構造体と中心構造体を繋いでいる橋梁

保存と再活用

19参Ⅲ老場坊は上海創意産業聚集区に指定されている。これによって歴史的建築の保護と運営を両立させようとしている。この歴史的建造物を改修する上でまず重要なことにオリジナルの外観を崩さないということが挙げられる。また特異な内部空間を保持し続けつつ、時代にあった新しい機能の需要に応えなければならない。1933年に建設された旧屠殺場は改修直前までは隣接する九龍ホテルの補助施設として、あるいは格安の貸し倉庫として一部つかわれていた他、半分以上はすでに廃墟となっているような有様であった。内部通路は壁で塞がれまるで迷路ようで、そのため一時は、都市探検愛好家たちの注目のスポットとなっており、今でも彼らの残した痕跡があちこちに見える。

屠殺場という機能に答えるため、〈回〉の字形に設計された建物は内側の構造と外側の構造をつなぐたくさんの橋梁が空中を飛んでいる。動線も一見すると複雑で、変化に富んだ空間である。正面の西側立面は数年前に全体的に赤色の塗料が塗られているばかりか、一階は増築された建物の壁で塞がれており、正面から入るには唯一残された配管を通り抜けるほかのような有様で、その他に設備や小屋など全体的に増築された部分が多かった。しかし、逆に取り壊された部分は非常に少なく全体的な建築空間としては1933年の建設当初から大きく変わってはいないようであったため改築修繕するにあたっては非常に状態が良かったといえよう。

内部空間も基本的に建設当時の空間構造を保持してはいたが、パーティションが増築されていたり、必要なくなった階段が壁で塗り込められたり、取り除かれたりしていた。内外をつなぐ橋梁も取り除かれたり壊れていたものもあり、内部空間は多種多様な建築素材で埋め尽くされており統一性に欠けていた。そこから得られるイメージは、まさに廃墟という状態であった。

修繕設計の原則

①オーセンティシティ

可能な限り原設計に復元し、空間デザインもこれに沿う。立面、スロープ、橋梁、フラットスラブとマッシュ

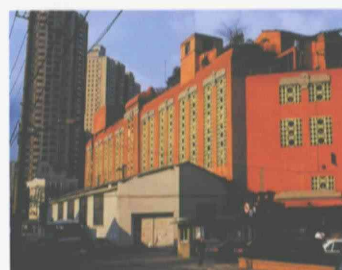


図 2-67 改修前西側立面
(<http://forum.xitek.com/printthread.php?threadid=390839>)

ルーム・コラム、コンクリートによる装飾模様、鋳鉄による通風口のデザインなど特徴的な部位の保護修繕も重視する。すでに失われた部分については原材料、加工方法に沿って旧態の復元を試みる。

②新旧分離

エレベーター等、新規に必要なとされる機能については歴史的要素とはっきり分ける。

③可逆性

今後新たに増築が必要な場合は原設計に復元可能なように可逆性を持たすことを原則とする。

④安全性

構造検査で十分な安全性が得られない場合は、できるだけ外観に影響を与えないように構造部材を組み入れる。

増改築に関して

この旧屠殺場の修繕設計においては上記の原則に従った上で「創意産業としての運営の可能性」に基づいて計画されている。保存と今後の可能性についてどのように改修したのかを個別に見ていく。

パーティション

原設計にある元々の内部の仕切り壁の多くは壊され、逆に勝手に新しい間仕切り壁が増築されている。のちに増築されたものの大部分を取り除き、今後の機能を考慮し新たに間仕切りが必要な場合には可逆性を考慮する。

階段

建設当時の階段の大部分が残っているが、メインエントランスの外階段は壊されていたため、復元設計した。また、今後要求される機能に従い、中心部に二つの階段を増設した。

エレベーター

原設計においては荷物用のエレベーター一基が備えられていたが、その後さらに3基の荷物用エレベーターが増設されていた。そのうち2基を取り壊し、2基は客用エレベーターとした。

ターに換える。

トイレデザイン

元来工場建築であるため、トイレの専有面積は非常に小さく、簡易的なものであった。今後の施設使用を考えて、各階に3カ所のトイレを新たに設置した。建築構造への影響を最小限にするために床面を400mm上げ、その下に排水設備を入れている。

その他、給排水、配電、空調、換気などの新たな設備が設置は、基本的に保護と利用の原則に従い、配管、配線を集中させ、堅坑は配線位置と対応させて穴をあけ、構造に極力影響しないように配慮する。原則として物流が頻繁に行われ、廃棄物が多く出る大型の飲食店は上層には入れず、建築にかかる負荷を極力減らすことにする。

幾度もの増改築で中心棟の最上階はもはや建築家バルフォースが設計したものではなくなっていた。改修直前の状態は5層で小屋組には簡易的な軽量鉄骨が架かりスレート瓦が葺かれていた。改修計画では中心棟を1層から3層までをひとつの空間と見なし、4層5層は一体化させ、床面に鉄骨を架け床を強化ガラス張りとして多目的ホールに変貌させた。これによって空間全体の一体感を保ちつつ、下層への採光の確保とドラスチックな空間体験が可能となった。

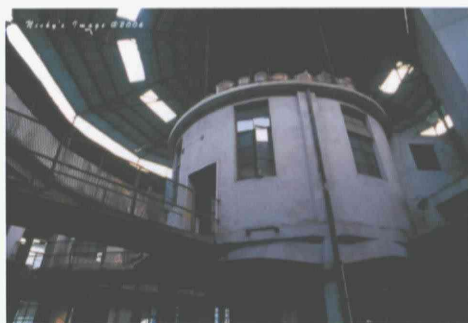


図 2-68 改修前天井
(<http://forum.xitek.com/printthread.php?threadid=390839>)



図 2-69 改修後



図 2-70 改修後天井

建築保護ポイント

外立面

西側立面は1933年当時の図面をもとには完全に復元し、全面に塗られていた赤い塗装は専門技術を用いて洗浄し、建設当時の色彩と質感を取り戻した。立面前にあった外灯も唯一残った一基をもとに復元された。

橋梁

空中を飛ぶ多くの橋梁が造り出す空間はこの建築の最も大きな特徴である。外周棟と中心棟は26もの橋梁で結ばれており、そのうち2基は破損していたが、残りの保存状態はよく、1933年の竣工当時の姿に戻った。

マッシュルーム・コラム

フラットスラブを支える八角形と四角形の断面をもつ2種類のマッシュルーム・コラムは外周棟に用いられている。八角形断面の方は西側に、その他には四角形の方が使われている。修繕に際してはこれらを完全に保存しこれらを完全に保存する。改修前の状態は表面に漆喰やペンキが塗られ、時代も大きさも違うタイルが貼られていたりというものだった。西側側柱の原設計の人造石洗い出し仕上げはすでにかなり破損しており、洗浄後、従来の方法で新たに仕上げをやり直している。

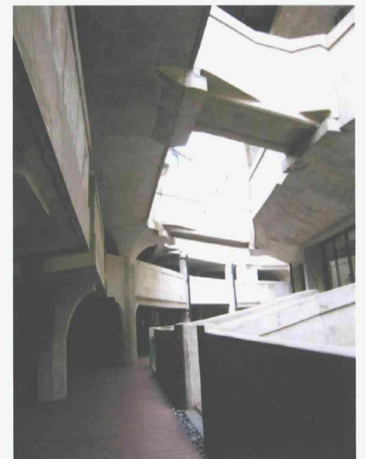


図2-70 マッシュルーム・コラム

内部空間のデザイン

内部空間のデザインは空中を飛ぶ橋梁とマッシュルーム・コラムが織りなす創意産業の中心にふさわしい空間が求められている。基本的な設計手法は「不変」もしくは「少変」といえるだろう。無駄に豪華な装飾に頼ることはこの空間の価値を減ずることになりかねない。複雑な内部空間に差す光は橋梁や柱に当たり様々な影をつくり出し、それはまさに幻想的といえる効果をつくり出している。これを守るために店舗の広告を極力抑え、各種設備のサインも空間を乱さないよう色彩を抑えている。また、牛の通った道などにはシンプルなサインが添えられており、時間を超えて当



図2-71 サイン

時の状況に思いを馳せることができるようになっているのは面白い。

今後の課題

上海創意産業投資有限公司と錦江国際実業発展会社が総額7000万元を投資し始まった保存改造工事は2007年11月に全行程を終え、2008年2月に正式にオープンとなった。しかし、創意産業に則したテナントは集まりが悪くまだまだ空き店舗も多い。それでも建築空間自体の魅力は高く、メディアにも取り上げられ話題にのぼり集客力は上がっている。今後の内部プログラムが課題となっていくことは間違いない。

さらにこの地域の再活性を促す中核となるには外部周辺環境と連動していく必要がある。都市計画局の計画ではすでに周辺環境も保存再生のエリアに指定されている。19参Ⅲ老場坊の横には黄浦江につながる河が流れ、近代に架けられた優美な橋も架かっている。また、近くには里弄も多く残り近代の雰囲気を残している。現在河岸には治水のためか高い壁が築かれ親水性はお世辞にも高いとは言えない。しかし向こう岸の新しいビルでは2階に広いテラスを設けイタリアンレストランを開き、水辺と19参Ⅲ老場坊の外観を同時に楽しむようになっている。これから19参Ⅲ老場坊を中心に周辺環境も巻き込んで成長するこの地域の未来の可能性を強く感じさせてくれる。



図 2-72 水辺

2.3.1 上海新天地

1999年2月、太平橋地区改造項目のひとつである「上海新天地」の開発は上海でも特に早い時期に行われた歴史的建築を使った都市再生であり、また里弄という上海特有の集合住宅を社会に再評価させる足架かりとなった。

新天地は旧フランス租界、黄陂南路、西は馬当路、北は太倉路、南は自忠路に囲まれた2つの街区、計3万平方mの敷地をもつ。香港の瑞安グループと国有企業の上海復興建設有限公司が総額1.5億ドル(内97%が瑞安グループ)を投資した。

里弄の利用

新天地で里弄が利用されたのは、1961年に全国重点文物保护单位に指定されていた「中国共産党第一次全国代表大会会址(一大会址)」の存在が大きい。

現在興業路76号、78号である里弄はそもそも共産主義者の李漢俊の住居であった。この住居は1920年に建設された樹德里という石庫門里弄の一部で、花崗岩の門柱、門の上の西洋的装飾、外壁は青磚と呼ばれる中国の伝統的なレンガと西洋式の赤いレンガを組み合わせたの典型的なデザインの里弄である。1921年7月23日、中国各地の共産主義者13人がここに集まり正式に中国共産党を立ち上げた、歴史的、政治的にも重要な場所である。

この重要な意味をもつ里弄を中心に全体に当時の雰囲気を残すため、同済大学による各建物の調査結果をもとに保存すべき建物が選定され、設計は日建設計インターナショナルと同済大学建築設計研究院が担当した。



図 2-77 新天地の里弄

設計内容

興業路で分かれる北側街区では基本的に既存の里弄をはじめとする歴史的建築を残し、また路地空間などの空間的スケールも保存する。それらはレストラン・ショップ・バー・ライブハウスなど商業施設として再利用する。南側街区では

一大会址に配慮し、興業路に面する建物は残すが、その他は建て替え、街区内部にプラザをつくりその周りをショッピングセンターで囲む。北側街区から南側街区のプラザまで新たにストリートを一本通し、これが新天地の2つの街区を密接に結びつけるメインストリートになる。

歴史的建築の保存については構造調査を行い既存の構造体を利用できる物には補強を施し、そうでない場合は外壁のみか利用可能な部分のみを残し、あとは復元工事を行う。解体した建物の外装材は可能な限り再利用し、復元部分などに仕上げ材として用いる。屋根には防水、断熱を施し、下水道、電気等設備を設置し現代的な諸機能を完備する。60年代にペンキで書かれた「写真館右」などの歴史的な痕跡も保存する。

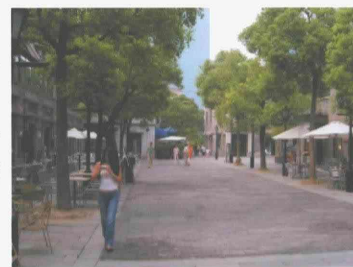


図 2-78 メインストリート

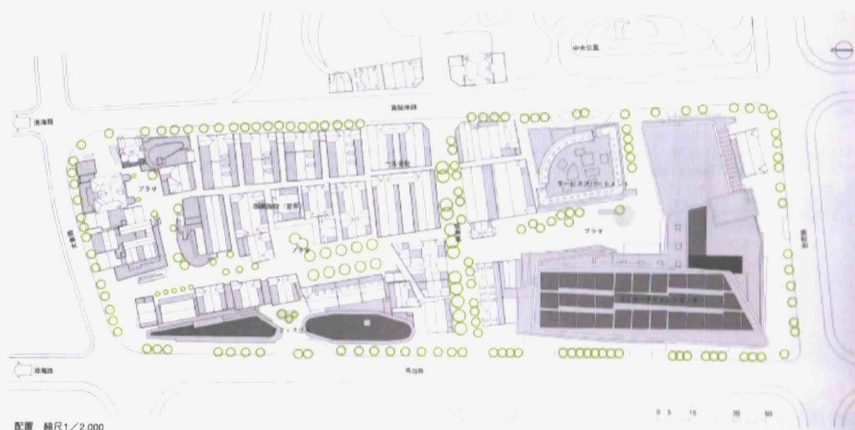


図 2-79 新天地配置図
(『新建築 2001.11』新建築社 2001.11)



図 2-80 新天地開発前
(『新建築 2001.11』新建築社 2001.11)



図 2-81 新天地開発後
(『新建築 2001.11』新建築社
2001.11)

設計思想

商業的プロジェクトとしての経済性と歴史的建築の保存という相反する要求に、アカデミックな保存ではなく景観や空間的スケールを保存し内部空間を商業空間として再活用するという手法で答えている。また街区中心に新たに通されたメインストリートは普段街区の内部に隠れている里弄を外部に出現させ、里弄という上海の住居文化を社会に認識させることに成功した。

新天地の評価

2001年6月にオープンした上海新天地はまたたく間に話題になり、国内外から多くの観光客を集めた。現在では上海観光には欠かせないスポットになり、莫大な経済効果をもたらしている。経済効果と里弄の評価という大きな結果をもたらしたが、同時に住居建築の再開発におけるマイナス面もともなっている。居住空間を再開発するということは、まず住人を強制的に移転させるということである。新天地開発の際に移転させられた住民は約2300戸、8000人にのぼった。また、直接開発に関係しない場所でも、新天地の成功により周辺の地価は平方m当たり8000～10000元だったものが20000元になるという高騰をみせている。経済的な再開発としては成功としか言えないが、古くから住む周辺住民も移転を余儀なくされる事態を引き起こした。それでも1990年代、開発一辺倒であった上海に歴史的建築のもつ価値を一般に広く再認識させた功績は何よりも

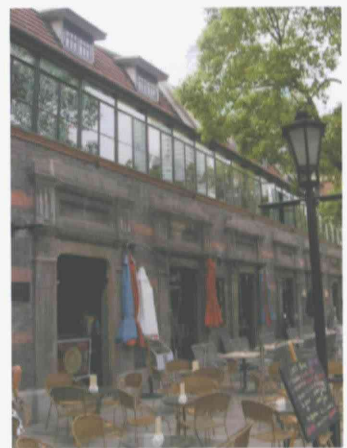


図 2-82 里弄が表にでている

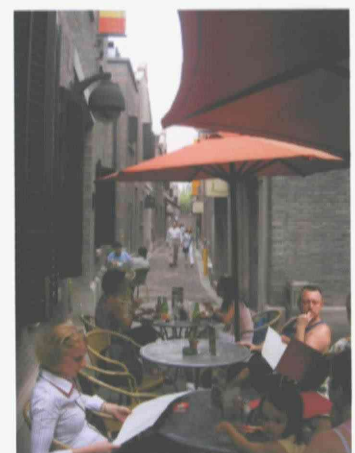


図 2-83
上海の必須観光スポットである

大きいものである。上海新天地は歴史的建築の保存と再利用のメルクマールとなり近代建築遺産を多く抱える上海にその後多くの影響を与えている。

2.3.2 泰康路田子坊

泰康路概要

田子坊が位置する街区は上海市街地の南部、元フランス租界内であった盧湾区泰康路にある。南は泰康路に面し、北は建国中路、東西は思南路と瑞金二路に挟まれている。この街区は基本的には1920年代に形成され典型的な里弄をもつ伝統的街区となっている。この街区の発展はフランス租界の発展と密接な関わりを持っており、フランス租界を形成する上で重要な要素となっている。フランス租界と中国人居住区、商業居住区と工業区がこの地帯に広がり、社会背景、建築環境ともに多様性をもつ構造となっているのがこの街区の大きな特徴である。上層階級の住居である花園住宅区(庭付住居)、中層階級のための新式里弄住区、下層階級と工員のための簡易里弄ならびに比較的小さな工場が立ち並ぶ工業区など分けられる。泰康路の発展形成の歴史は上海の住宅建設と租界建設のひとつの縮図ともとらえることができよう。

泰康路210弄

そのような歴史的空間構造を持つ街区が田子坊として息を吹き返したのは1998年、画家陳逸飛が工場のひとつにアトリエを構えたことに端を発する。アトリエを構えた泰康路210弄2甲は1935年に建てられた旧海華制革廠で、30年代から70年代に建てられた比較的小さな工場が立ち並ぶ210弄を中心に写真家尔冬強や画家王劼音などのアーティストもアトリエを構え拠点とし、芸術家街としてにわかに活気を帯びてきた。翌1999年、画家黄永玉が陳逸飛のアトリエを訪れ、自らもここにアトリエを構えることを決める。その黄が泰康路210弄を中国最古の画家の記述である莊子の田子方篇から『方』と同じ発音である『坊』を当てて『田子坊』と名付けた。2000年5月には上海市経済委員会、盧湾区政府の指導で田子坊の開発は進み、その後も画家、陶芸家、建築家、デザイナーなど芸術家が増え、泰康路210弄で最大の5階建ての工業ビルには世界各国10の国々の芸術家がアトリエを構え、ビルは International artists



図 2-84 田子坊入り口



図 2-85 陳逸飛アトリエ

factory と名付けられた。2003 年までには 17 の国から 107 の芸術に携わる企業が集まっていた。田子坊は上海屈指の一大アートエリアにまで成長したのである。

田子坊の拡大

アートエリアとして成長した田子坊であったが、旧工場の空きも無くなり、すでに工場区のみでの発展は望めなくなっていた。一方、隣接する住居区では築後 70 年を超える里弄では、現代的な設備も整っておらず、住民たちは生活の改善を求めている生活の改善を求めている。そんな住人の一人であった周心良は周りの小さな工場に企業が次々と入居していくのを見て、自分の里弄でも同じことができるのではないかと考えた。2004 年、30 平方メートルほどの住居を数千円かけて改修し、貸し出しを始めた。借り手が見つかるかは一種の賭けだったようだが、その賭けに勝ち、有名な服飾デザイナーがアトリエとして借り上げ、月 4500 元の家賃を得ることになった。このあと他の住人もこれを真似て里弄を企業に貸し出し始め、急激に田子坊は拡大してゆく。

これが歴史的住居建築である里弄の再活用の始まりであり、田子坊の特異な形態、つまり旧態をほぼそのままに街区全体が保存されたまま、再活用されていく形態が生まれたのである。



図 2-86 里弄の空間構成がそのまま利用されている



図 2-87 田子坊全景
6 と 5 の間の道が泰康路 210 弄である
番号は建築の種類になっている
すなわち
1. 花園住宅
2. 新式里弄
3. 花園里弄
4. 石庫門里弄
5. 里弄工場
6. 現代工場
7. 簡易里弄

田子坊の歴史的価値

現在、田子坊が位置する泰康路周辺は1910年から1915年に至るフランス租界の第3次拡張の際に開発された地区である。田子坊を含む街区は東西大きく2つ機能に分けることができる。ひとつは西面に広がる伝統的な近代上海の住居、石庫門里弄を中心とした里弄区、もうひとつは東面に広がる工業を中心とした工場区である。里弄区内をさらに建築類型でみると石庫門里弄、新式里弄、伝統民居、花園住宅などが見てとれ、様式も中華式、新古典主義、スペイン式、バロックなど様々である。

その歴史的価値は以下の2つにまとめられる。

①多様性をもつ構造・住居

すでに述べたように泰康路田子坊がもつ多様な構造はその歴史的背景から現れたものである。数ブロック北を東西に走る淮海路はフランス租界のメインストリートであり、商業の中心であったの中心であった。そこから南には花園住宅や最新のマンションが並びのさらに南に進むと会社役員などのための高級里弄がつくられた。フランス租界の南端にあたる泰康路まで開発が進むと比較的規模の小さい里弄の開発にとどまり、それより南は中国人の開発による一般市民向けの安い里弄になる。このようにきたから南にむかってグラデーションを描くように住民の階層が違ってくる。田子坊の街区内にはその痕跡がはっきりと残り北側には花園住宅や高級里弄が建ち、南には一般的な石庫門式里弄や簡易里弄がならぶ。

②多様性をもつ構造・ゾーニング

瑞金二路西側の外国人住居区、泰康路南側の中国人居住区、思南路東側の工業区、建国中路北側のフランス租界の政府施設というように田子坊の街区の四方は全く異なる機能を有していた。このことは田子坊の街区にも影響を与え、東側から西に向かって、徐々にスケールの小さくなる工場が並び西、北側から中心に向かって街路も少し広い高級住宅街から非常に密集した里弄が並ぶ地区となる。

これらがこの街区の混然としながらも調和のとれた不思議

な景観をつくり出しているといえよう。その接合点である泰康路210弄周辺から田子坊が生まれたのはこの街区が内在的に持つ魅力に惹かれたのであり、必然であったように感じる。

2004年、上海市都市計画局は正式に泰康路田子坊を上海市泰康路歴史風貌区とし、全体保存計画を公布し、歴史的建築と街区の保存を始めた。

田子坊の運営方法

2005年5月、田子坊は第一次上海創意産業聚集区に指定された。田子坊の運営方法は上海の他の都市再生例とは大きく異なる。一般的には最初に大きな投資をして大規模な開発を行って、のちのちテナント料などで改修していくやり方がほとんどである。しかし田子坊では建物の所有権は住民にあり、住民とテナントとして入る企業とが直接やり取りをする形態になっている。民間が組織する管理会社がテナントの仲介、環境整備などを行い、テナント料の2割りを管理費として支払うことになっていた。しかし、2008年4月に区政府組織の田子坊管理委員会が正式に発足し、田子坊の管理は民から官に完全に移ることになった。田子坊管理委員会は1000万円の資金を投入し、下水道、緑化など住民の居住環境の改善をはかり、居住を前提として歴史的建築の保存修復も計画している。

課題と今後の発展

拡大を続ける田子坊からは当初の「アトリエの路地を曲がるとおばあさんが家の前で洗濯物を洗ってた」というような住と商が渾然一体となった不思議な空間は失われつつある。知名度とともに高騰するテナント料は収入の少ない住民の心をゆれ動かし、自らの住居をテナントとして貸し出す方向へ進んでいく。また、世界各国からひっきりなしに訪れる観光客は住環境を悪化させているように見える。

上海創意産業センターの副総合プランナーであり田子坊の計画者でもある呉梅森いわく、当初、陳逸飛が借りた工場の家賃は日に1平方メートルあたり5角であったという。現在の家賃は1日1平方メートルあたり6～8元にもなっている。

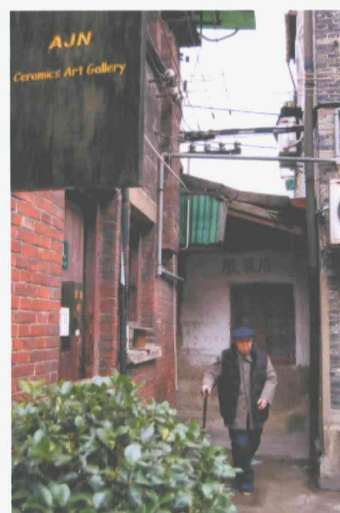


図 2-88
街から生活臭が消え失せつつある

里弄の一階のみならず二階三階も借りられており、入居率は100%であるという。しかし、入居する企業の方も田子坊に店を構えるという看板効果を狙ってか、品質の悪い店舗やカフェ・レストランが増えてきているように思う。

呉梅森は2007年5月のインタビューで田子坊をこのように語った。

「市民には収入が入り現代的な暮らしをおくれ、創意産業は発展し企業は成長する。政府には税収が入り、歴史的建築は保存され再び息を吹き返す。田子坊はひとつの到達点である。」

第 3 章

上海国際博覧会

2008年、首都北京で開催された夏季オリンピックは国家にとって最重要行事であり、まさに国家の威信をかけたプロジェクトであった。そしてその2年後の2010年、中国第2の都市上海で国際博覧会（中国語表記では世博会）、つまり上海万博が開催される。北京オリンピックでは紫禁城背後に延ばされた軸を主として各競技施設が建設された。これはまさに中華都市のイデオロギーであり、首都北京の文化イデオロギーであった。では上海万博において体现すべき上海の文化イデオロギーとは何であろうか。



中国2010年上海世博会规划区控制性详细规划（第三版）
REGULATORY PLAN OF THE WORLD EXPO 2010 SHANGHAI CHINA

図 3-1 上海万博詳細計画図
(http://www.expo2010china.com/expo/sh_expo/zlzx/index.html)

2010年の上海万博は「Better City Better Life」を主題にし、その会場は上海市中心区の南、黄浦江兩岸にまたがる5.28万平方kmの敷地にきまり、国内外から提出された10の全体計画案から選ばれた3つの案を、市が組織した計画チームがさらに検討し上海万博全体計画と詳細計画ならびに18項からなる専門計画が完成した。その全体計画の5つの原則はこのようなものであるこのようなものである。

- ① 中国文化の神髄と調和の理念を重んじ、万博をもって調和した社会、調和した都市をあり方を体現する。
- ② 環境、科学技術など、全方向に通じる新しい理念をつくり出す。
- ③ 来場者の角度から計画を考え、便利で楽しく快適で安全な万博にする。
- ④ 歴史的建築の保存と再利用を重視し、環境的価値、科学技術的価値、人文的価値を体現する。
- ⑤ 会期後の継続利用を重視し、都市の発展を持続させる。

この中で注目されるのは④である。歴史的建築の保存利用は万博の主題のひとつになっている。

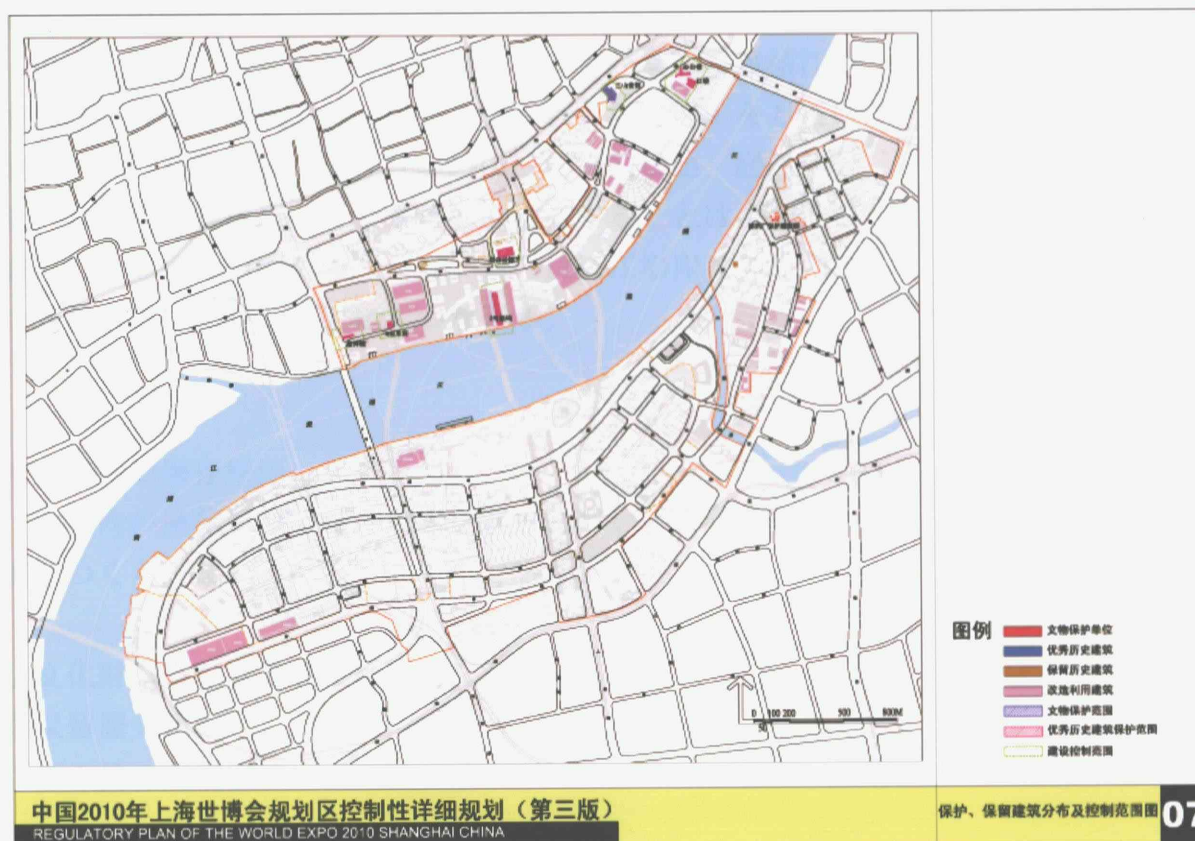


图 3-2 上海万保護保留建築分布範圍図
(http://www.expo2010china.com/expo/sh_expo/ztzx/index.html)

万博会場内万博会場内の産業遺産

黄浦江沿岸は中国の最重要大型船舶造船所、研究所がつくられた場所である。さらに中国最初の鉄鋼業、水道場、紡績工場が造られた場所でもある。2010年の上海万国博覧会会場には江南造船廠、上鋼三廠や市文化財の三山会館、区文化財の上海溶剤廠保護建築群など近代工業文明遺産が多く残る。中でも1865年の洋務運動時期に建てられた江南造船所は中国の近現代工業発展の歴史の証人であり、その代表格である。万博の全体計画推進の中で上海世博土地控股有限公司は専門家に浜江歴史工場区について保存、改造、解体の問題についての研究を委託した。この歴史的場所を改造利用し、万博の機能と空間の要求を満たし、空間特性と文化の継続と発信の場とする。

市民にとっては巨大なクレーンやドックがならぶ黄浦江沿岸のなじみ深い風景になっている。これら産業遺産を万博に取り込み、産業遺産の保存計画の中で建築的価値、経済的分析、万博後の継続利用など多角的に検討することは主題⑤の継続した都市の発展につながり、この黄浦江沿岸は都市の中に再び組み込まれることにもつながる。

産業遺産の保存原則

会場内の産業遺産の保存および改修について3種の保存原則がつけられた。

- ①文化財および優秀歴史建築
- ②保留歴史建築
- ③その他の保留建築

文化財および優秀歴史建築は法によって定められた指定文化財である。全体的な保存を原則とし計画では修繕と再利用を主とする。

保留歴史建築は文化財指定を受けていないもので、風貌、構造、装飾など建築的価値を有するか、人文歴史的価値など明確な特色を持つもつ歴史的建築である。可能な限り保存

し、修繕と再利用を行う。増築、改築の際は原型を保持する。建築的歴史、技術、芸術的価値の度合いによってそれぞれ保存と利用を進める。

その他の保留建築は建築的価値は一般的であるが、建築的構造、形式が万博の展覽空間やサービス空間として再利用できる利用価値の大きい建築である。工場や公共、政府機関の施設などがあり、個別に展覽会場やサービス施設などの計画に沿って改築、再利用する。

これら保存、保留建築以外にも各工業区域内の埠頭、船台、ドック、レール、重機機械など建造物もまた重要な歴史遺産とし、展示場、野外活動所、あるいは屋外会場の景観として利用する。



図3-3 江南造船廠産業遺産分布図
(『時代建築 2006-2』 同濟大学
出版社 2006.3)

江南造船廠

上海浦西の瀘浦大橋と南浦大橋の間、南に黄浦江を臨み、東は江辺路と高雄路、西は魯班路、北は龍華東路と高雄路に囲まれた長方形の区域内に江南造船廠がある。区域内北側の旧求新船廠と合わせて75万平方mの土地が上海万国博覧会会場の全体計画全体計画の内に組み込まれ、万博の企業館の展覽会場区になっている。江南造船廠は、洋務運動の中で1865年に前身の江南製造局が清朝政府によって創設され、1867年にこの場所に移転してきた。江南造船廠は中国近代工業の発祥の地であり、中国工業の歴史においても重

要な場所である。年間30万トンを超える生産能力を持ち、8万トン級の船舶の設計、建造、修理を行える。現在まで中国の造船業の中核をなし、万博会場の建設が始まる2008年まで活動を続けていた。今後は上海長興島造船基地に移り、さらにその規模を拡大する。江南造船廠内は船台が3つ、ドックが3棟、埠頭が10箇所、機械設備は4000台以上を有する大型の造船所である。廠内に残る大部分の建築物、構造物は状態がよく、保存および再利用価値の高いものであった。しかし、江南造船廠はその性格上長い間機密保持されてきたため、廠内の建造物についても情報が非常に少なかった。そこで、万博会場全体設計の際の現状資料とするため、世博土地控股有限公司は江南造船廠の調査を中船第九設計研究院に委託し、2004年3月から2004年10月まで調査を行った。

江南造船廠の産業遺産は4つに分類される。

- ①オフィス
- ②工場および倉庫
- ③特殊な構造物（ドック、船台、レールなど）
- ④大型機械設備（クレーンなど）

その保存利用に際しては建築形態のみ考慮するのではなく、歴史文化価値、建築形態、技術的価値、都市景観の4面から総合的に考慮し、留（保存）、改（改造）、拆（解体）の3つに分類する。

留、改、拆

国家の工業の発祥地あり、近代船舶、水上飛行機の発祥地でもある江南造船廠内には5つの重要な産業遺産が現存し、歴史的価値を有している。これらは全面的に保存し、再活用する。

旧求新船廠には3棟の歴史的建築が現存している。旧求新廠設計大樓、旧造船事業部オフィス、旧求新廠党委オフィス（紅樓）の3棟は木骨レンガ造建築で歴史的価値は突出してはいないが状態もよく歴史的地区の形成には不可欠であり全面保存と再利用をする。

江南造船廠の工場、倉庫については平屋で大スパンをもつ鉄骨造であり、構造は問題なく、内部に巨大な空間を有しているため改造の余地は大きい。ドック、船台、埠頭は造船所の特有の特殊な構造物である。ドックは長さ240m、幅40m、深さ20m余りの大型地下建築である。船台は岸から川に向かって傾斜する台で広さは約20m、長さは100m余りで、下部には設備機械室が備わっている。これら構造物は空間形式が独特であり、構造も複雑で、建造および解体には莫大な費用がかかる。産業文化の特質を有し、水辺の都市景観にもなっている。江南造船廠には3つのドック、2つの船台と若干の埠頭があるが、このうち清の光緒年間に建造された二号ドックを保存建築として、そのほかは文化、経済、景観などを考慮しながら改造、再利用する。



図3-4 二号ドック

(http://www.expo2010china.com/expo/sh_expo/zlzx/sbzz/node1685/userobject1ai39793.html)

さらに「留」と「改」を詳細に見ていく。「留」の建築はまず、外観の保存および復元作業を行う。剥離し、汚れた外壁塗装の塗り直しや痛んだ木構造の交換、回廊、塀、植栽などを行い、歴史文化の特色を保存し、後世に残す。内部空間は構造体の維持を基本とした上で、新しいプログラムを入れ込み、建築に活力をもたらす。但し、新しいプログラムに沿って改造を加える場合は新旧の差を明確にする。「改」の建築はその構造体を利用し、全面的な改修を加えて新しいプログラムを挿入することができる。大規模の工場、倉庫などに適用される。

「留」 翻訳館

海外列強に対抗するため、近代的な大型軍事工業を興すことが急務と考えた清朝政府によって設立された江南造船廠に当時最新の近代科学技術の知識を普及させ、お雇い外国人の力を借りること無く自力で軍艦、大砲などを建造することを目的に、1868年に江南造船廠付属の翻訳館が設立された。当時、清の知識人の中で外国語に精通しているものは皆無であったため、漢語が堪能で科学技術にも精通していた英国人J. Fryerを招聘し、さらに欧米の宣教師たちにも協力をあおぎ約180点の書籍を翻訳した。翻訳館は平屋、二階建てあわせて8棟建造され、総部屋数は74室、その内二階の24室が翻訳館として使われ、一階50室は広方言館という



図3-5 江南造船廠翻訳館
(『時代建築 2006-2』 同済大学出版社 2006.3)

名の中国思想と西洋科学技術を教える近代学校であった。現在は二階建ての木骨レンガ造の一棟だけが残っている。建築面積430平方mでバルコニーをもち、現在は江南造船廠問診所になっている。構造的制限により改造の余地は少ない。自身の歴史人文価値から新たに中国工業歴史資料展示館として利用する。長い間に幾度も改造され、外観も変えられている。写真、資料により旧来の風貌を復元する。

「改」西区溶接工場

西区溶接工場は江南造船廠の典型的な大スパンをもつ工場である。鉄骨造、高さ18.5～26.8m、幅60mの大空間をもち、改造の余地の大きい建物である。会期中は企業展示館として利用し、その後はまた別のプログラムで活用される。経済的試算によるとこの工場を再利用する場合と同面積の施設を新たに建てるばあいでは、前者の工事資金が約2500万元、後者は約9250万元が必要となり、再利用にかかる費用は新築の27%の費用に抑えられる。改造再利用は建設費を大幅に減らすと同時に歴史の連続性を保つことができる。

水上交通ネットワーク

上海万博においてもひとつ重視されるのは会場が黄浦江によって二分されていることである。2007年4月、上海万博外部交通計画が発表された。この計画は黄浦江沿岸の9地点（内万博会場内に3地点）に「水門」とよばれる船舶発着場をつくり、一部の来場者は、「水門」から黄浦江を経て、万博会場に入ることができるというものである。試算によると2010年上海万博の来場者は7000万人を見込んでいて、その内80%は地上交通を利用し、残り20%1400万人が水上交通を利用するとのことである。万博出展、見学の人の流れを分け、黄浦江沿岸地区の都市の新しい景観をつくりだすことを目標としている。また、この水上交通網を蘇州河とも繋げ、国内外の来客者に水上からの上海をみせるという案もでている。



图 3-6 水門分布図
(http://www.expo2010china.com/expo/sh_expo/zlzx/index.html)

上海イデオロギー

2007年12月18日、上海万博中国館の建設が始まった。中国工程院院士、華南理工大学建筑学院院长である何鏡堂の設計で伝統的建築の斗拱のような外観をもち、「東方之冠」というテーマで設計された。これはその形が古代中国の冠に似ていること、そしてもうひとつはアジアの頂を表しており、まさに中国國家を意図した象徴的な建築である。この中国館をはじめ主題館、万博センター、演劇センターの4つのメインパヴィリオンが黄浦江に向かって伸びる万博軸の左右に配置される。これはまさに北京オリンピックの焼き直しであり、中国イデオロギーの体现である。しかし、これが北京と違うところは北京オリンピックの軸が紫禁城を起点としているのに対し、上海万博の軸は黄浦江を終点と定めているところである。そして川を挟んだその先には江南造船廠がある。ここに上海イデオロギーがみえる。黄浦江から始まった近代上海は、その沿岸の商工業に支えられ東アジアの主要都市となった。1978年の改革開放政策により、外国資本が流入して目覚ましい発展を遂げた上海は再び国際都市の地位に立つことになった。そのとき上海は自らのイデオロギーを探し求めることになる。1990年代、人民広場の開発の際、上海市が依拠した都市のイデオロギーは北京を頂点とした伝統中華イデオロギーであった。あれからわずか10年、その10年の間で上海はついに「水と産業遺産」という自らのイデオロギーを明確に浮かび上がらせることに成功したのである。



図3-7 上海万博中国館
(http://www.expo2010china.com/expo/sh_expo/zlzx/sbzz/node2333/userobject1ai49629.html)

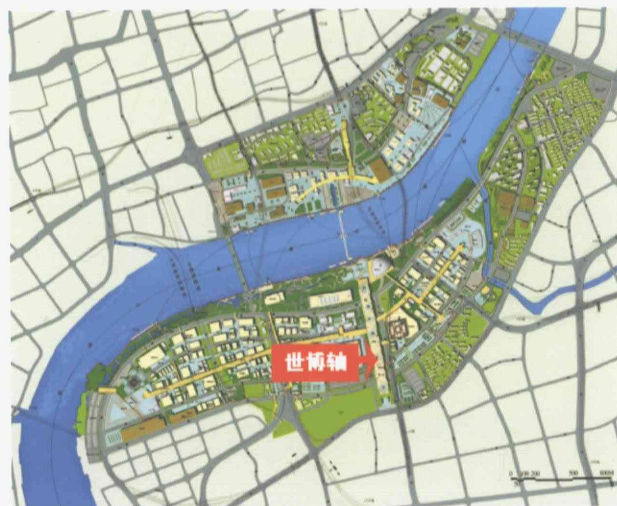


図3-8 世博軸
(http://www.expo2010china.com/ghjs/ghjs_sbgh/index.html)

まとめ

上海における近代建築近代建築の保存および再活用を都市レベルから建築単体レベルまで見てきた。上海の歴史的建築遺産保護は1986年第二次国家歴史文化名城に指定されたことに始まる。東アジアにおける近代建築の宝庫としてすでに日本などから注目を浴びていた上海であったが、その近代建築の価値を認識し始め、1990年に上海市第一次優秀近代建築を選定し2005年の第四次までに632カ所2138棟が上海市優秀近代建築の指定を受けている。1991年には面的な保存として歴史文化風貌保護区を指定し2003年に上海市街地に12カ所、合計約27平方kmが正式に歴史文化風貌保護区の指定を受けた。わずか10年足らずでこれほどの保存が行われたのは官の力が強い中国ならではのからだと思われるかもしれない。初期の人民広場や新天地の開発では確かにそうであり、一面をあらわしているが、しかし決してそれだけではない。

まず歴史的建築の調査、選定には同済大学の力が大きいことが挙げられる。早くから文化財保護のにつとめ、1998年には同済大学内に国家歴史文化名城研究センターが設立され、歴史的都市保存の最先端の研究が行われている。特に第三次優秀近代建築の選定では上海市に残る産業遺産にいち早く目をつけ、蘇州河沿いの産業遺産を一斉に調査している。また、都市計画局内に同済大学卒業生が多くいることも大学と政府機関が密な連携をとれる重要な要素になっている。また、そのような産業遺産の価値を最初に見いだした芸術家たちの存在も大きい。蘇州河沿岸の旧工場や倉庫を借り、アトリエとして利用し、今では中国屈指、世界的にも注目される現代芸術都市になった。また、数人の芸術家から始まった田子坊芸術街は現在では里弄を含め街区全体の保存再利用にまで広がり、多くの観光客を呼び込む上海の新スポットになっている。これらは決して官主体で進められたわけではなく、むしろ逆に民から始まった保存や再活用を官がその価値を認めバックアップしていくという構造が見える。特にこれら産業遺産の再活用と芸術は創意産業（Creative Industries）という概念と結びつき、製造国から創造国への転換を促進させている。2007年までにM50、19参Ⅲ老場坊、田子坊などを含む75カ所が創意産業聚集区として指定されている。経済効果も大きく生産総額は500億元に達し、上海市の生産総額の6%に当たるまでに成長を遂げている。このように産業遺産保護と創意産業、経済面が民間、公的機関とともにうまく結びついているのは上海の大きな特徴である。

日本では遅々として進まない近代建築遺産の保存は、都市開発都市開発が現在最も盛んだと思われる上海において遥かに進んでいる。それは公的な力が大きいからというだけではなく、近代建築が上海のアイデンティティであるということを市全体がよく認識していることが最も大きな要因であるように思える。都市の歴史に対する誇り、それこそが歴史的建築遺産を利用した都市再生の根底にあるべきもののなのだ。

参考文献

張松 王駿 編『我們的遺產・我們的未來—關於城市保護的探索與思考』同濟大學出版 2008.3

阮儀三 著『城市遺產保護論』上海科學技術出版 2005.4

藩文兵 著『上海里弄的保護與更新』上海科學技術出版 2005.4

韓好齊 張松 著『東方的塞納左岸 蘇州河沿岸的藝術倉庫』上海古籍出版 2004.5

張松 著『歷史城市保護學導論—文化遺產和歷史環境保護的整正性方法』同濟大學出版 2008.3

伍江 王林 主編『歷史文化風貌區保護規劃編制與管理』同濟大學出版 2007.12

『時代建築 2006-2』同濟大學出版 2006.3

曹輝著『開埠後的上海住宅』中國工業建築出版 2004.7

上海市都市計畫管理局編著『上海城市規劃管理實踐』中國建築工業出版 2007.5

黃永融 著『風水都市 歷史都市の空間構成』學芸出版 1999.4

『建築與文化 8』中國出版集團 2007.8

藤原惠洋 著『上海 疾走する近代都市』講談社 1988.1

村松伸 著『上海・都市と建築 一八四二—一九四九』PARCO 出版 1991.4

田中重光 著『近代・中國の都市と建築』相模書房 2005.4

上海圖書館『老上海地圖』上海畫報出版 2001.6

『新建築 2001.12』新建築社 2001.12

田中淡 著『中国建築史の研究』弘文堂 1989.7

上海人民政府 <http://www.shanghai.gov.cn/>

上海市城市規則劃 <http://www.shghj.gov.cn/>

上海市地方誌辦公室 <http://www.shtong.gov.cn/node2/index.html#>

上海同濟城市規劃設計研究院 <http://www.tjupdi.com/website/index.asp>

上海創意產業中心 <http://www.scic.gov.cn/>

瑞安房地產 <http://www.shuionland.com/sol/tabid/1111/Default.aspx>

人民廣場的變容 <http://www.shxxgz.com/zuopin/zp/2008/zps/old/html/o17.htm>

創知天地 <http://www.kic.net.cn/kic/Home/tabid/36/language/zh-CN/Default.aspx>

田子坊 <http://www.tianzifang.cn/>

世博網 <http://www.expo2010china.com/>

おわりに

当然ながらこの論文は未完である。ここに取り上げた事例は未だ現在進行形であり、留学を終え帰国してからのわずかな間にも大きな動きを見せている。新しい都市再生の事例も続々と誕生しとても短時間でおいきれものではない。今思えば上海に留学を決めた理由は圧倒的なスピードで変化する都市を肌で感じてみたいと思ったことであった。オリンピック、万博と立て続けに起こる状況には誰しも日本の60、70年代の高度経済成長期を重ねる。日本の近代建築はこの時期に最も大きな被害を被ったと思っている私は、現在の上海においてどのような状況であるか見てみたかった。留学前、学部生のときに訪れた上海は美しく装飾されたレンガ造の建物を壊し、新しくビルを建てていくそんな印象であったが、いざ留学してみると、その近代建築の多さと、保存再生の規模に驚愕させられることになった。日本のような歴史博物館的保存はほとんど無く、今も利用されながら同時に保存されている。このように高度経済成長と歴史的建築保存を両立している大都市が東アジアにあるのかと愕然とした。日本の都市に住む我々がどこかで見失ってしまった目に見える都市の歴史への誇りというものはまだここには残っている。これから先、どんなに疾走していても上海はこの誇りを胸に進んでいくだろう。そして今度は我々が学ばなければいけない、失ってしまった都市の歴史に対する誇りをいかに取り戻すかを。

謝辞

学部生から修士、留学と6年間の長きにわたり指導を賜った高村雅彦教授に多大なる感謝の意を表したいと思う。

また、留学を受け入れてくださった同済大学建築与城市规划学院の阮儀三教授、張松教授、ともに同済大学に留学し調査や文献の翻訳を手伝っていただいた岡本和久君、白井誠一郎君、副査についていただき貴重な意見をいただいた法政大学陣内秀信教授ならびに永瀬克己教授にも同様に目一杯の感謝を表したい。

同時期に留学し切磋琢磨し励まし合った高村研究室修士4年の島康之君、妹尾悠次君、ともに卒業をむかえることになった高村研究室修士3年田口美穂さん、二宮咲さん、修士2年の野中蘭さんにも多大な協力をいただいた。ここに感謝する。